





(二〇〇八年一月刊「連衆」50号より転載)

## 伊豆の縄船

前田霧人

「鮫」が初めて歳時記に登場するのは昭和八年(一九三三)刊の改造社版『俳諧歳時記』で、高浜虚子が担当した「冬の部」である。何故「鮫」が冬の季語なのか。

鮫船のろくろを捲ける女房達

史江

両眼は撞木の先や撞木鮫

冬青

例句は同年刊『続ホトトギス雑詠全集』からのこの二句であり、「新題で収録すべきものは、一々各作家に解説を求めた。」と「凡例」にある。しかし、「鮫」を冬季とした理由について「季題解説」には何の説明もない。翌年、虚子は『新歳時記』(三省堂)を刊行するが、もうそこに「鮫」の掲出はない。『俳諧歳時記』と比較して半分の掲載季語数では、割愛せざるを得なかったのか。

「鮫」が冬季である理由を初めて掲載したのは昭和三十一年(一九五六)刊の山本健吉編『新俳句歳時記』(光文社)である。先の改造社版『俳諧歳時記』編纂を手伝った経験を持つ彼が初めて手掛けたこの歳時記は、柳田国男の援助を得て民俗学、自然科学の成果を取り入れ、歳時記の記述を一新したものとして評判を呼んだ。

確かに、その「鮫」解説は魚類学的考察から、種類、地名、「鱧」、「鱧の鱗」、蒲鉾原料のことに至るまで詳細である。しかし、鮫は「とくに冬季とは限らないが、大形の猛魚として冬に入れてゐる。」との説明は到底納得の出来るものではない。実は、傍題と例句にある「鮫船」が真実への鍵なのであるが、彼はそれに気が付かない。

この後、大小を問わずほとんどの歳時記に冬の季語「鮫」が掲出されるようになる。その一方で、海水浴場に出没する鮫が毎夏のようにニュースになり、昭和五十年(一九七五)には映画「ジョーズ」が大ヒットする。また、ダイバーの憧れは「甚兵衛鮫」と遊泳すること。大阪の「海遊館」や沖縄の「美ら海水族館」では、この世界最大の魚類を一年中見ることが出来る。

そんな時代になっても、相変わらず「鮫」は冬の季語で概ね山本健吉の解説をなぞったもの。冬季であることの説明も、山本説を鵜呑みにした東京美術版『風生編歳時記』の一書のみで、他の歳時記には説明すらない。

平成十六年(二〇〇四)、現代俳句協会編『現代俳句歳時記』(学習研究社)が「鮫」を夏季とした。しかし、これもまた「食用の旬は夏」との安易な解説であり、「鮫」を冬季とする従来の歳時記に頻出する古典的例句を転載するだけのものでは、何をか言わんやである。

そしてここに、これら歳時記の怠慢を指摘する二つの書がある。一つは昭和十五年(一九四〇)刊の虚子編『新歳時

記」改訂版である。これには、晩夏・七月に増補された所謂熱帯季題の一つとして「鱻」が掲出され、「南海を遊弋し、巨大なるものは舟を覆し、人肉を喰う。」と解説されている。

この熱帯季題は昭和二十六年（一九五二）刊の増訂版では省かれた。しかし、先の改訂版に準拠し改訂版と同年に刊行された虚子編『季寄せ』（三省堂）には、虚子没後の昭和三十九年（一九六四）に改訂されるまで、「鱻」が晩夏・七月の季語として掲載されていた。

もう一つは平成八年（一九九六）刊の園部雨汀『魚の歳時記』（作品社）で、次はその「さめ」抜粋である。雨汀は若い頃に漁師をした経歴を持ち、静岡県伊東市で俳誌「伊豆」を主宰した俳人である。海の男らしい歯切れの良い文章がこれまでの問題を見事に全て解決している。

関東では小田原蒲鉾が有名だが、これはかつて伊豆の縄船が漁をしてこれを原料にして大繁盛した。昔のことだから夏は獲れた魚が傷むので漁はできない。同じように加工する人も困るので、冬に限られた。俳句の季語に「冬」となっているのも、これが季語の起こりになっていくからだ。しかし現在はサメの姿を見るのは夏、人がサメの被害に会うのも夏、冬のサメとしては北の国に棲むネズミザメだけである。（略）

この頃南からヨシキリザメ、北からネズミザメが仔を産むために集まる。生まれた仔の餌はサンマ。サンマの便りとともにこの漁が始まるのだ。

「縄船」とは鮪延縄漁船のことで、鮫を獲るものが「鮫船」、高知県室戸では「鱻縄」とも呼ばれる。大正時代、伊豆には百隻以上の縄船がいた。当時は無線もなく、西風の吹く頃の漁で遭難することが多く、「縄船後家」という言葉があつた程である。やがて、縄船は太平洋戦争で徴用されて南の海に行き、帰って来た船はないという。

そして、現在では鮫の漁獲量は気仙沼港のある宮城県が断トツの日本一を誇る。平成十七年（二〇〇五）では以下、岩手、北海道、青森、福島、鹿児島、富山、高知、神奈川、静岡と続く。気仙沼の水揚げは、ほとんどが吉切鮫で一年を通して漁獲量は安定し、学校給食のメニューにも取り入れられている。次に多いのが毛鹿鮫（ネズミザメの地方名）で、五月から九月に掛けてが漁の最盛期である。

以上、「鮫」の季に疑問を覚え、少し調べれば分かることを述べた。次は歳時記に掲載された例句である。

鱻の死に白一団の海女よぎる	友岡	子郷
猫鮫と蝶鮫とある至近距離	上野	遊馬
本の山くづれて遠き海に鮫	小澤	實
鱻の棲む海航く夜は抱擁し	たむらちせい	
鮫を飼う日の大ガラス磨きおり	岩佐	光雄

皆「鮫」が冬の季語であることなど御構い無しに自由に詠み、自在に俳諧味を發揮している。歳時記が効用を失っている。それが現状である。歳時記は、その構成も記述も含め、根底から見直すべき時期に来ているのである。

# ひやひやと昼寝

## 前田霧人

### 第一節 芭蕉の句

ひやひやと壁を踏まへて昼寝哉

芭蕉

この句は元禄七年（一六九四）、芭蕉が義仲寺無名庵を本拠として湖南に滞在中、大津の木節亭に遊んだ時の作である。当時芭蕉に随侍していた支考の『笈日記』（\*1）に、この時の二人の問答が記されている。

芭蕉「此句はいかにきぎ侍らん。」

支考「是もただ残暑とこそ承り候へ。かならず蚊屋の釣

手など手にからまきながら、思ふべき事をおもひ居ける人ならん。」

芭蕉「此謎は支考にとかれ侍る。」

こう言つて、芭蕉はただ笑うだけであつた。当時「昼寝」はまだ無季で、季語は初秋の「ひやひや」、句の成立も七月上旬とされているから、勿論「とかれ」た「謎」は「残暑」のことではなく、「思ふべき事をおもひ居ける」の方である。

この時、芭蕉が最愛の女性、寿貞の訃報に接してから一月、また、その新盆は間近である。蕉門の人々との交流を精

力的にこなす一方で、その合間にふと訪れた昼寝のひとつ時、芭蕉の脳裏に去来するものは多く寿貞のことであつたらう。上記の問答には、そうした芭蕉の姿を傷ましく思い、精一杯の優しさで接しようとする支考の気持ちがよく表れている。

物憂げな思いに耽る人の趣は、確かに句中に看取される。仰向に寝そべつたまま、足をそこの壁にもたせかけて居る。思うともなく物を思つて居ると、暑いとは言いながら壁をふまえた足裏には、早くもひやひや秋が感ぜられるのである。そうした季節への淡い感傷が、さりげなく語られて居る。（頼原退蔵『芭蕉俳句新講』\*2）この年五月、寿貞の子、二郎兵衛を伴い深川の庵を出立した芭蕉は伊賀上野に帰省した後、京都、湖南に遊んだ。そして、洛外嵯峨の去来別荘、落柿舎に滞在中の六月上旬、病身を案じていた寿貞の訃報に会う。次は猪兵衛宛六月八日付芭蕉書簡（\*3）の一節である。

寿貞、無仕合せもの、まさ・おふう同じく不仕合せ、とかく申し尽くしがたく候。（略）何事も何事も、夢まぼろしの世界、一言理くつはこれ無く候。

芭蕉は猪兵衛に寿貞死後の処置、肉親の後見を依頼し、二郎兵衛を江戸に帰す。七月中旬、伊賀上野に戻つた芭蕉は十五日、実家の盆会に列し「尼寿貞が身まかりけるとききて」と前書きする次の一吟を成す。

数ならぬ身とな思ひそ玉祭り

芭蕉

「数ならぬ身とな思ひそ」との呼び掛けには、生涯「無仕

合せもの」で終わった寿貞への深い哀惜の情と自責の念、その亡き魂を慰め、彼自身の深い悲しみをも慰めようとする芭蕉の切々たる思いが如実に表れている。

そして、芭蕉自身もまた、この僅か三カ月後、

旅に病で夢は枯野をかけ廻る 芭蕉

の句を遺して十月十二日夕刻、大坂南御堂前の貸座敷で永眠する。その時、医師として芭蕉の最期を看取ったのが木節、二日前の十日夜、枕辺に呼ばれ遺書三通を認めたのが支考である。また十二日夜、この二人を含めた去来、其角、丈草、惟然、二郎兵衛ら十人で淀川の河舟に乗って伏見まで上り、翌昼、芭蕉の遺骸を納めたのが義仲寺である。何れも「ひやひやと」の句に係わりの深い人たち、場所であった。

芭蕉が年少の愛弟子、支考と初めて対面したのは四年前の元禄三年（一六九〇）三月、湖南滞在中のことである。この時、芭蕉は四十七歳、支考は二十六歳。そしてこの後、四月六日に芭蕉は大津国分山の幻住庵に入り七月二十三日まで滞在する。次は芭蕉と支考が互いを評した興味深い文である。

ともにこもれる人ひとり、心ざしひとしうして、水雲の狂僧なり。薪をひろひ水をくみて（芭蕉「幻住庵記」）

阿刀家本草稿断簡\*4)

一とせ湖南の幻住庵に。白頭の翁を見て。才能は文字をはなれ。風雅は心を。あそばしむる物なりと聞て。此翁とあそぶ時は。酒にえ（酔）へる人の。何ゆへならでも。ただおもしろきこちにぞ侍りける。（支考「陳情ノ

表「『本朝文選』\*5)

盤子（筆者注、支考の別号）は二月初めに奥州へ下り候。いまだ帰り申さず候。こいつは役に立つやつにて御座無く候。其角を初め、連中皆々悪み立て候へば、是非無く候。もつともなげぶし何とやらをどりなどて、酒さへ呑めば馬鹿尽くし候へば、愚庵、気をつめ候事なりがたく候。（去来宛元禄五年五月七日付芭蕉書簡\*3)

芭蕉は幻住庵に共に籠もり薪水の労を執つたとされる支考を「心ざしひとしうして、水雲の狂僧なり」と言う一方で、「酒さえ呑めば馬鹿騒ぎばかりして芭蕉庵にじっとして居れず、旅に出れば何時帰って来るか分からない、役に立たない奴で皆の悪まれ者」と言う。芭蕉は支考を手を負えないけれども憎めない、可愛く見所のある奴と想っていたのである。

「ひやひやと」の句は「初秋の爽快味を味わおうとした気分があり、軽いユーモラスな所があつて」（\*6）と評される一方で、この句に纏わる諸々の人々や出来事に思いを馳せる時、何かしみじみと万感胸に迫って来るものがある。

然るに、現在では「昼寝」は夏の季語、「ひやひや」は初秋ではなく仲秋が大勢である。勿論、言葉は生き物であるから歴史的な変遷を経るのは当然のことである。しかし、この二つの季語の変化は俳句というものにとつてどのような意味を持つのか。そして、何よりも芭蕉は自らの句に科せられたこの結果をどのように思っているのか。そのことも秘かに想像しながら、これから論を進めて行くこととする。

## 第二節 昼寝の巻

### 二・一 「昼寝」が季語になった理由

先の「西瓜考」参考文献などによれば、「昼寝」が夏の季語として歳時記に掲載されたのは「ひやひやと」の句が成った元禄七年（一六九四）から百年と少し経った享和二年（一八〇二）、『俳諧新季寄』及び同書を合刻した『俳諧季寄大全』で夏・四月に「午睡」が掲出されたのが最初である。

また、その根拠として「大工日やうのひる寝ハ、四月八日に初りて、八月朔日に終る。三尺寝といふハ、日影三尺寝ることぞ」と付説されている。「日やう」は「日傭」で、日雇いのことである。

その後、文政元年（一八一八）の『季引席用集』から嘉永四年（一八五二）の『増補改正俳諧歳時記葉草』まで「午睡」、「昼寝」、「三尺寝」、「昼寝札」などが夏・四月あるいは兼三夏などとして掲出される。

一方、類題句集などで「昼寝」の題を設けたのは、文献（\*6、\*7）によれば歳時記より少し後、文政三年（一八二〇）刊『俳諧発句題叢 前編』の夏之下（六月）に「昼寝」を立てたのが初出である。また、天保以後になると、かなり散見し、何れも夏・六月の季題としている。

そして、近現代では正岡子規の俳句革新以後現在に至るまで、全ての歳時記に「昼寝」は夏（一部を除き、三夏あるいは晩夏）の季語として掲出されている。

なお、「三尺寝」は上記の「日影三尺寝ること」が正しいのであって、頼原退蔵も文献（\*7）に明記している。文末の表2に掲げた近現代歳時記では、昭和五年（一九三〇）刊の小泉汪外著『最新俳句歳事記』で「三尺寝は労働者などが狭い場所で窮屈に午睡をむさぼることの意。」としたのが誤った解説の最初である。

その後、改造社版『俳諧歳時記』、高浜虚子編『新歳時記』で相次いで右掲の正誤両論が併記されたことが影響したのか。表2の歳時記で昭和十年（一九三五）以降、昭和三十九年（一九六四）に『図説俳句大歳時記』（角川書店）で正しい解説と詳細な考証がなされるまで、「三尺寝」解説のないものは別にして、正しい解説のものは皆無であり、それ以降も僅か六編、平成の新刊では三編という有様である。

「昼寝」が夏の季語とされた時、その根拠、即ち昼寝と夏を結び付けるものは上記の如く「三尺寝」、陰暦四月八日に始まり八月一日に終わるという大工、日雇いの昼寝であった。

しかし、これには二つ問題がある。一つは陰暦七月は初秋であり、三尺寝は厳密には三夏から初秋に亘るものであること。二つ目は大工、日雇いの昼寝は主に屋外であり、屋内の昼寝と季節との関係が考慮されていないことである。

三尺寝以外に昼寝と夏との係わりが解説されたのは、明治四十二年（一九〇九）刊の中谷無涯編『新修歳時記』が初見である。「夏は夜短く睡眠の時少く、且つ日中暑氣に倦みて、午睡するもの多し。」との解説で、現今の歳時記も概ねこれ

を踏襲したものとなっている。

この解説は一見如何にも説得力があり、昼寝と夏との関係は動かし難いもののように思われる。しかし、これにも一つ大きな落とし穴がある。それは、昼眠いのは果たして夏だけか、他の季節は他の理由でやはり昼は眠いのではないかということであり、「昼寝の生理学」が登場する所以である。

## 二・二 昼寝の生理学

井上昌次郎監修『昼寝のすすめ―短時間睡眠の不思議』によれば、前夜しっかり睡眠を取っていても昼間、眠気に襲われるには二つの要因がある。一つは昼食を摂ったことにより脳に「満腹物質」が出て「食べることは終了した」という情報と同時に「眠ってもいいよ」という情報に切り替わる仕組みになっている。これが眠気を引き起こす原因となる。

また、人間の脳の中には一日を眠い時間帯（休息）と眠くない時間帯（活動）に分ける数種類の生体リズムがプログラムとして入っている。その内、昼食後の眠気に関係するのは一日を二分割し、それぞれに休息と活動の時間帯があるという概半リズムと呼ばれるものである。それからすると、人によって時間はまちまちであるが、昼過ぎが丁度休息の時間帯のピークに当たるため、眠気が出て来る。

そして、これら二つの要因が重なり合う所に昼間の眠気、昼寝というものがある。即ち、昼寝は本来、季節に関係なく一年中毎日誘発される人間の自然な生理なのである。

地中海諸国や熱帯地方など日中暑い国には昼休みの時間を

長く取り、昼寝（スペイン語でシエスタ）をする習慣がある。その一方で、堀忠雄『快適睡眠のすすめ』には次のような指摘がある。

昼寝の習慣は熱帯から亜熱帯にかけて分布するため、高温環境にたいする対処行動と考えられてきた。ところが、昼寝の習慣がある地域を地図にプロットしてみると、赤道をはさんで緯度にして南北四五度のはんいに分布していることがわかる。このはんいには北海道まで含まれる（略）。一方、地中海沿岸地方も冬は気温が一〇度以下になり、一年をつうじてとられるシエスタが、対暑戦略として機能していると考えるのにも無理がある。たまたまこれらの国では昼寝が許容され、そうでない国ではタブー視されたという文化差と考えるほうが妥当だろう。

同書には、日本でも土木、建築、造園などの現場では昼食後に昼寝を取る習慣があること、西日本の農家の一部では、暑い季節には農作業の合間を見て木陰に入り、昼食を摂ったら皆で寝てしまう習慣があり、沖縄県にもかなり公認された昼寝習慣が残っていることが書かれている。

一方、おやつは眠気を催す午後二時（昔の時刻で未の刻、八つ時）に休憩を取った昔の習慣の名残であること、また、最近はおフィス街でも昼食後に仮眠休憩室で昼寝を取る社員が増え、大阪ではコーヒー一杯分の料金で昼寝が出来る「昼寝屋」というビジネスが繁昌したり、季節を問わない昼寝の習慣がホワイトカラーに広まっていることなどの記載もある。

即ち、昼寝には年齢、職種、屋内外などにより様々の形態がある。そして、それは必ずしも夏に限らない。屋外での昼寝は季節の影響を受けるが、肉体労働者の屋内での昼寝、勤労者の休み時間や休日、夜勤明け、幼児、高齢者、病者、三食昼寝付と言われる専業主婦、旅行帰りや時差呆け、あるいは犬、猫など。ペット、こうしたものの昼寝は季節を選ばない。また、それぞれに興味深い俳句の題材である。

「昼寝は八朔（陰暦八月一日）まで、炬燵は亥の子（陰暦十月亥の日）から」という三尺寝に類似する諺もあるが、炬燵での昼寝も捨てがたいものであり、説得力はない。

面白いのはインターネットによる検索の結果で、春は「昼寝」の季節というものが非常に多いのである。「春眠曉を覚えず」という言葉があり、これまた「朝寝」は何時の間にか春の季語となっているが、朝眠いということは同様に昼も夜も一日中眠いのであり、それが冬の季節を過ぎ春を迎えた人間の自然な生理である。

そして、一風変わって面白かったのは、夏を迎えたある航海士嬢で、「甲板での昼寝がキツイ季節になったものだ。」と夏の季節をむしろ、ぼやいているのである。

## 二・三 昼寝が詠まれた季節

歳時記などに掲出された「昼寝」例句を調べた結果、まず近世においては「昼寝」が季語として歳時記に掲出された一八〇〇年代初め以降も、その季語としての認知度は作者により異なり、例えば一茶は「昼寝」を季語とした句を多く作っ

ているが、一茶より少し前の成美、少し後の梅室などは他の季語が同居する句の方が多く見られる。

子規編著『分類俳句全集』には「昼寝」の古句六十一句が掲出されているが、その中で「昼寝」以外に季語のないものは一句で、他は全て別に季語を有したものとなっている。近世において、昼寝が夏の季語であることは、まだ一般に広く認められたものではなかったと考えられるのである。

一方、その「昼寝」以外の季語により、どの季節の「昼寝」が詠まれたのかを調べてみると、やはり一番多いのは夏の句である。それ以外の季節では次の句があった。まだ残暑の厳しい初秋が多いのが特徴であろうか。なお、季節区分は『増補俳諧歳時記葉草』に準拠し、『角川俳句大歳時記』を一部参照した。

初春	梅が香を鼻に渡して昼寝かな	谷水
仲春	昼寝して花にせはしき胡蝶かな	雪窓
三秋	山人の昼寝をしばれ蔦かづら	桃妖
初秋	ひやひやと壁をふまへて昼寝哉	芭蕉
初秋	昼臥の間は秋の扇哉	宗因
初秋	あさがほの花にみとれて昼寝かな	智月尼
初秋	絡緯の声引いる計りねむき哉	臥央

（絡緯は、こほろぎ。きりぎりす。蟋蟀の異名。諸橋轍次『大漢和辞典』による。）

次に近現代であるが、少なくとも明治三十年代以降の全ての歳時記に「昼寝」が掲出され、季語としての認知度は十分

の管にも拘わらず、一句中に他の季語が同居するものが多いことに驚かされる。「昼寝」を季語とすることの必然性、有季俳句の必然性、季語の多さ、様々のことに思いが及ぶ。

以下は、文末表2の歳時記よりそうした例句を集め、季節別（季節区分は『角川俳句大歳時記』に準拠、以降も同様）に整理したものである。これらを見ると、やはり夏の句が一番多い。また、その次に多いのが春の句であり、その半数が海女の句であることを差し引いても、前項に述べた「春は昼寝の季節」というインターネット検索の結果を反映するものになっていることは興味深い。

三春 アルプスの雪のまだらや昼寝起 黒岩 芋石  
 三春 百姓昼寝熊蜂梁を打つて去る 飯田 龍太  
 三春 麦の青樹の青棘と昼寝さむ 野澤 節子  
 初春 海苔の簀のあみかけてある昼寝かな 安藤 林蟲  
 仲春 桑畑を山風通ふ昼寝かな 松本たかし  
 晩春 昼寝寛干潟を踏めばこそばゆき 佐野まもる  
 晩春 海女の舟海女の昼寝の刻ただよふ きうちつねこ  
 晩春 廃船の影に海女等の三尺寝 大橋 枯草  
 晩春 生涯の火胼胼を腿に海女昼寝 小芝 潮子  
 晩春 深井戸に映りて海女の昼寝寛 宮里 流史  
 晩春 海鳴りの腰を隆めて海女昼寝 原子 公平  
 晩春 荒筵垂らして海女の三尺寝 神谷 わさ  
 晩春 昼寝海女居りて産屋に似たるかな 森田 峠  
 晩春 命綱軒に吊して海女昼寝 西岡 安夫

晩春 芝草に溶けゆく仔馬昼寝かな 金谷みつえ  
 晩春 蚕が桑くふ音のさやけさ昼寝する 加藤知世子

\*

三夏 暑き日の昼寝は少し死ぬに似て 山田みつえ  
 三夏 親方は廊下に涼し三尺寝 岡田 匠  
 三夏 足うらの少し涼しき昼寝かな 松浦 光子  
 三夏 大空に滝を仰ぎて昼寝かな 大町 桂月  
 三夏 汗垂れて昔恋せし顔昼寝 加藤 楸邨  
 三夏 さめにけり汗にまみれしひるねより 久保田万太郎  
 三夏 午睡の時計が緊める汗の腕 羽根田薫風  
 三夏 蚊帳の絵の舟一進み昼寝覚め 河野あきら  
 三夏 昼寝の国蠅取りリボンぶら下り 西東 三鬼  
 三夏 昼寝して餓鬼の夢見る鶉匠かな 寺野守水老  
 三夏 腰みのを干して鶉匠も鶉も昼寝 奥山 孟  
 三夏 農道で昼寝してをる草刈女 水谷ササヲ  
 三夏 イチゴゼリー固まるまでを午睡して 高山あい子  
 三夏 天草干しに大股昼寝足りし海女 佐野 美智  
 三夏 昼寝寛祭の音となりゆくも 相馬 遷子  
 三夏 梁をくちなはわたる昼寝かな 綾部 玉春  
 三夏 鯨舟の著く日暮まで昼寝かな 岡本癖三酔  
 三夏 金魚守昼寝も池の水音なか 原 好郎  
 三夏 らんちゅうの真つ逆様の昼寝かな 登 よしこ  
 三夏 川蟹の垣にのぼり来昼寝宿 松本たかし  
 三夏 昼寝よりさめてもひとり黒き蝶 山奥 巖

三夏 蠅を追ふ手もたゆくなる昼寝かな  
 三夏 昼寝して老ゆ蟻の穴深くなる  
 三夏 軒下に蜘蛛の囀光る大昼寝  
 三夏 一枚のバナナ青葉を敷く昼寝  
 三夏 病葉のひかり昼寝をしてしまふ  
 初夏 五月人形すすばけて妻の昼寝  
 初夏 麦干して今日は土足のまま昼寝  
 仲夏 堰番の昼寝の足へ水馴棹  
 仲夏 堤番一人残して昼寝かな  
 仲夏 昼寝覚め身体髪膚百合に沁み  
 晩夏 昼寝覚め大事去りたる西日かな  
 晩夏 昼寝覚む裸の胸を煙の影  
 晩夏 裸なる伊豆の昼寝路もどりけり  
 晩夏 閻王の前に昼寝の床几在り  
 晩夏 みんなのしみわたりたる昼寝かな  
 晩夏 昼寝かなし空蟬のごと背を割つて  
 晩夏 山繭にみどりの深き昼寝覚  
 晩夏 麻干して麻大尽の大昼寝  
 晩夏 蓮の香のさやかなり昼寝ふと覚めて

\*  
 \*

中山 稲青  
 中島 斌雄  
 関根黄鶴亭  
 渡邊千枝子  
 杉山 羚羊  
 萩原 蘿月  
 久代 久代  
 高野 素十  
 小松 貞江  
 中村草田男  
 鳴田 青峰  
 富永寒四郎  
 中村 汀女  
 山口 誓子  
 滝沢伊代次  
 大北たきを  
 黒田 杏子  
 小林 静子  
 白田 亜浪  
 荒川ひろし  
 須川 洋子  
 皆吉 爽雨  
 木村 蕪城

三秋 百姓の昼寝の葛の葉を敷きぬ  
 初秋 足しびれて邯鄲の昼寝夢さめぬ  
 三冬 昼寝ざめ肌冷たく子の抱かれ  
 三冬 一枚の障子を引きし昼寝かな  
 三冬 よき昼寝なりし毛布をかけありし  
 三冬 山僧の昼寝を覗く狸かな  
 三冬 大昼寝夢のなかもで鯨かな  
 新年 トランプの鬼が出てゐる昼寝かな  
 勿論、これらの他、一句中に「昼寝」以外に季語のない沢山の句がある。それらの中には夏の季感あるもの、他の季感あるもの、季感などないもの、詳細に検証すれば様々の作品が存在するであろう。  
 次は幼児、高齢者、専業主婦、勤労者の休日、夜勤明け、時差呆け、病者、囚人、犬、猫など、季節とは係わりのない「昼寝」の句を一句ずつ挙げたものである。  
 ちらと笑む赤子の昼寝通り雨  
 老いて心たのしき時の昼寝かな  
 午前中三面六臂午後昼寝  
 昼寝より覚めて休みの日を数ふ  
 朝駟の夜討の記者の昼寝かな  
 時差呆けの子の大昼寝見逃せり  
 昼寝覚めて重き病の身にかへる  
 所 山花  
 正岡 子規  
 中村 汀女  
 尾崎 葵女  
 堺 梅子  
 矢ヶ崎奇峰  
 諸角 和彦  
 加藤三七子  
 秋元不死男  
 京極 紀陽  
 伊藤 璣子  
 増井 儀  
 中 火臣  
 宮地 淳  
 谷野 予志

いくひる寢覚めても獄と格子あり

竹下 陶子

座敷犬人の顔して昼寝せり

竹内 瑞芽

能舞台猫の昼寝は許しけり

藤井 律子

また、次は『虚子五句集』(\*10) から初句索引、季題索引により抽出した「昼寝」の句の全てである。序でに「朝寝」の句も付加してあるが、これにより虚子が何時何処で「昼寝」や「朝寝」の句を詠んだかが一目瞭然である。

まず「昼寝」の句は全十九句のうち、夏の句がお気に入り  
の千葉県鹿野山神野寺での七句を含む十六句と大勢を占める  
が、②は初秋の悲しい「昼寝」、⑦は旅先の「昼寝」で何れも  
初秋の季語を有せず、⑤は晩春の病室での「昼寝」である。

そして、春の季語「朝寝」の句は六句中、春に詠んだものは①、③、⑤の三句のみである。あとの三句は②が初秋、④、⑥が仲夏と、自由にその季節の「朝寝」を詠んでおり、②、⑥は「朝寝」以外の季語を有しない。

虚子は「昼寝」も「朝寝」も、季語の季など余り意に介せず、気の向くまま自由に詠んでいたのである。

① 昼寝せる妻も叱らずあまきない小商 「五百句」

大正八年

② とめどなき涙の果ての昼寝かな 「贈答句集」

「大正十三年八月、女兒を失ひし木国に。」

③ 三等待まわひ合昼寝の男起き上り 「五百五十句」

昭和十二年七月三日、東京駅付近写真

④ 昼寝覚め又大陸の旅つづく 「六百句」

昭和十六年六月八日、奉天大和ホテル止宿

⑤ 昼寝して花半日を無駄にせし 「六百五十句」

昭和二十一年四月二十一日、新潟医大病院病室

⑥ 我生の今日の昼寝も一大事 「六百五十句」

昭和二十一年六月中旬

⑦ 昼寝してゐる間に蕎麦を打ちくれて 「六百五十句」

昭和二十二年八月二十八日、長野、山口燕青居

⑧ 諸子会あろじす主の昼寝まだ覚めず 「六百五十句」

昭和二十五年七月二十二日、合同俳句会、草庵

⑨ 山風に吹きさらされて昼寝かな 「七百五十句」

昭和二十六年七月二十八日、山中湖畔さか下山

⑩ 昼寝して覚めて乾坤けんこん新たななり 「七百五十句」

昭和二十八年七月下旬、富士山麓さんろ中山廬

⑪ 昼寝せんかと思ひつつ山を見る 「七百五十句」

昭和二十九年七月十六日、千葉県鹿野山神野寺

⑫ 大昼寝して次の間の話声 「七百五十句」

⑬ 一切を放擲ほうてきし去り大昼寝

昭和三十年七月下旬、千葉県鹿野山神野寺

⑭ 昼寝するともなく椅子に深々と 「七百五十句」

⑮ 人々々々昼寝のわれを起すなよ

昭和三十一年六月三日、土筆会、草庵

⑯ 昼寝覚めけふも一日平凡に 「七百五十句」

昭和三十一年七月十九日、千葉県鹿野山神野寺

⑰ かびの香かに昼寝してをり山の坊 「七百五十句」

- ⑮ 昼寝せん行蔵すべて意のままに  
⑯ 昼寝する我と逆さに蠅叩

昭和三十三年七月中旬、千葉県鹿野山神野寺

\*

- ① 美しき眉をひそめて朝寝かな 「六百句」

昭和十七年四月十日、丸之内倶楽部別室

- ② 時化らしく尚も朝寝をつづけけり 「六百句」

昭和十七年八月十六日、箱根滞在

- ③ 法外の朝寝もするやよくも降る 「六百句」

昭和十八年四月十九日、横浜キリスト教青年会

- ④ 二三日朝寝昼寝や旅がへり 「六百五十句」

昭和二十三年六月二十七日、鎌倉寿福寺

- ⑤ 旅にあることも忘れて朝寝かな 「六百五十句」

昭和二十四年四月二十四日、愛知鳴海、野生居

- ⑥ 朝寝して今朝が最も幸福な 「七百五十句」

昭和二十六年七月三十日、山中湖畔下り山

### 第三節 ひやひやの巻

「ひやひや」は季語「冷やか」の傍題として歳時記に登場する。『図説俳句大歳時記』によれば、「冷やか」は文明八年（一四七六）の連歌学書『連珠合璧集』に「ひややかなる（風水など）」として秋に初出とあるから、随分と古い時代からの季語である。

近世、近現代の歳時記における「冷やか」の季節区分一覽を示すと文末の表1、表2の通りである。表1は先の「西瓜考」のものに文化五年（一八〇八）刊の洞斎著季寄『改正月令博物笏』（\*11）を加えたのみであるが、表2は編著者ごとの傾向を知るために相当数を追加した。また、掲載スペースなどの関係から両表とも多少の整理を行った。

表1によれば、近世歳時記における「冷やか」の季は天明三年（一七八三）の『華実年浪草』から享和元年（一八〇一）の『俳諧歳時記』まで「三秋」のものが少しあるが、芭蕉の時代の『増山井』を始め、初秋ではほぼ一貫している。

また、慶安四年（一六五二）の『俳諧御傘』に「ひやか」が掲出され、「初秋の事なり、暮秋にはかなはず」、「ひゆる・ひやひやなどのことば、ひやかとおなじ冷の字也、秋なり」と解説がある。これにより、芭蕉の時代には「ひやか」の語そのものも既に初秋の季語として認知されていたことが分かる。

次に表2の近現代歳時記であるが、「冷やか」の季は昭和八年（一九三三）の改造社版『俳諧歳時記』まで、近世歳時記の傾向を踏襲して初秋で一貫している。

そして、近世から昭和初期に至るまで連続と続いて来たこの大勢を最初に覆したのが「冷やか」を仲秋とした昭和九年（一九三四）刊の虚子編『新歳時記』である。

表2によれば、この後、一連の水原秋桜子編歳時記や第三版までの角川文庫版『俳句歳時記』の晩秋、『図説俳句大歳時

記』など一部の初秋を除き、仲秋あるいは秋のものが次第に大勢を占めて行く様子が明らかである。そして、昭和五十二年（一九七七）以降の新刊で「冷やか」を初秋あるいは晩秋とするものは一編もない。

しかし、表には記されていないが、実は近現代における「冷やか」の用例には初秋、仲秋、晩秋の秋だけでなく冬、夏、更には無季まである。以下、それぞれについて具体的に考察して行くこととする。

### 三・一 初秋の「冷やか」

近現代歳時記で「冷やか」を初秋とするものの代表は昭和八年（一九三三）刊の改造社版『俳諧歳時記』である。傍題は「ひゆる」、「ひやひや」、「下冷」、「秋冷」、「朝冷」、「雨びえ」。近世以来初秋でほぼ一貫して来た季語であるためか、「季題解説」は簡単に「秋に入りてヒヤヒヤと冷気を覚ゆるをいう。」とだけである。

この解説をもう少し詳しくしたのが昭和三十四年（一九五九）刊の平凡社版『俳句歳時記』で季題解説は秋桜子、傍題は改造社版『俳諧歳時記』に同じである。

「やはり秋になったな」と、ひとりうなずく感じの一つである。明け方や夜更けによくわかるが、雨が降れば昼間でもはつきりする。冬季ほど芯にこたえるのではない、表面的に感ずるものと思えばよい。

「新涼」の皮膚感覚といった意味の解説で、「ひやひやと」の句の壁を踏まえた足裏の触感にも合致したものとなってい

る。また、この平凡社版に準拠したと「あとがき」にある昭和五十一年（一九七六）刊の『新撰俳句歳時記』（明治書院）には「皮膚の感触である。」と解説に明記されている。

### 三・二 仲秋の「冷やか」

前項に挙げた「皮膚の感触」を初めて歳時記解説に明記したものが、改造社版『俳諧歳時記』の翌年に刊行された虚子編『新歳時記』である。そして、それは同時に初めて「冷やか」の季節区分を初秋から仲秋に改変したものであった。傍題は「秋冷」のつだけである。

秋になって感ずる冷やかさをいう。石の上に、或は板間につめたさを感じるくらい冷やかさである。

この虚子に追従し「冷やか」の仲秋区分を確固たるものとしたのが昭和三十一年（一九五六）刊の『新俳句歳時記』（光文社）に始まる一連の山本健吉が編集、あるいは解説をした歳時記で、傍題は改造社版『俳諧歳時記』に同じである。

秋になってなんとなく膚に冷気を覚えるの言う。

古来、初秋の季題としてゐる書もあるが、必ずしも拘泥することはない。むしろ「秋涼」「初涼」「新涼」を初秋とすれば、「冷やか」は仲秋、あるいは兼三秋とした方が妥当であろう。「新涼」は膚に覚える涼味であり、「冷やか」は膚に覚える冷気であるから、秋はそれだけ深まっている。それが晩秋に近くなると「やや寒」「うそ寒」を経て「朝寒」「夜寒」など、冷やかさよりも強いところの、寒気として膚に感じられて来るのだ。（山本健吉『基

## 本季語五〇〇選』

山本健吉の論は一見、確固たるものに思える。しかし、「冷汁」<sup>ひやじゆ</sup>、「冷奴」<sup>ひやご</sup>は夏、「冷たし」<sup>ひやたし</sup>は冬の季語であるなど、「冷」には「暖」、「暑」、「涼」、「寒」と続く一連の季節序列とは別物の何かがある。また、後に明示するように、傍題の「ひやひや」、「秋冷」、「冷ゆる」などには、仲秋という狭い季節区分には収まり切らない季節感の差が感じられる。

「新涼」が夏の「涼し」に対するもの、「残暑」が夏の「暑し」に対するものであるならば、「冷やか」は同じ初秋の「残暑」との対比の中に感得されるものであり、季節差を云々する前に対比するものの相違である。支考が「是もただ残暑とこそ承り候へ。」と評したように、先の芭蕉の句における「ひやひや」の本意、本情もそこにある。

「古来、初秋の季題」としている書もあるが、必ずしも拘泥することはない。」との言にも二つ問題がある。一つは文末の表に示す通り、「古来、初秋の季題」としている書もある」のではなく、「古来、ほとんどの書が初秋の季題としている」のであり、これは明らかな事実のすり替えである。

もう一つは「必ずしも拘泥することはない」の件である。

「西瓜」の季にあれだけ拘泥した人たちが「冷やか」については、いとも簡単にこのように言っただけで、季節区分の改変をやって退ける。それが必ずしも悪いと言っているのではない。その変わり身の余りの速さ、都合の良さに唾然としていたのである。

興味深いのは、先の「ひやひやと」の句が山本健吉個人の編集に成る歳時記の「冷やか」例句には一切入っていないことである。それは共同監修の『カラー図説日本大歳時記』（講談社）にはあっても、それをベースにした自著『基本季語五〇〇選』にはないという徹底振りである。

そこには、初秋であるとの考証が既に確立している芭蕉の句に対する彼の意識と拘りが明白に感じられる。そして、ここにおいて、この芭蕉の名句は歳時記例句としての行き場を正に完全に失ってしまっているのである。

同じ「皮膚の感触」を言いながら、虚子や山本健吉が「冷やか」の季節区分を初秋から仲秋に変更したのは「秋冷」を傍題として取り込んだことに、実は根本の要因があるのではないか。次に紹介する『関東ふるさと大歳時記』（角川書店）の「秋冷」解説を読んで、私はそう感じた。

秋になって肌に感じる冷気のこと。「冷やか」は体感的でやや狭いが、「秋冷」には普遍的な季感があって広い。

（略）「秋冷」が用いられるのは近代になってから。河東碧梧桐選『続春夏秋冬・秋之部』（明治三十九年・一九〇六）に、「秋冷」の早い作例が見える。（略）初秋にふさわしい季語だが、秋が深まったころに用いてもさしつかえない。（山下一海）

「冷やか」はそれだけで秋の季語、「冷たし」は冬の季語である。わざわざ「秋冷」と言うからには、それは秋の「冷たさ」であり、初秋からは少し冬の方向にスタンスを移した所

にある。また、そうではなく「冷やか」の「秋」を強調する意味であれば、そこには初秋だけではない仲秋、晩秋を含めた三秋の趣が深い。右掲の解説にはその辺のことが分かり易く表現されている。

虚子は当時まだ新しい季語であった「秋冷」を独立した季語としては立項せず「冷やか」の傍題としたことにより、初秋では収まりが付かなくなり、全体として仲秋としたのではないか。また、山本健吉の場合は傍題に「冷ゆる」が加わって、その要求は更に大きいものとなった。彼の解説に出て来る「冷気」の語がそれを象徴している。「冷やか」の季節区分の改変は本来の文学性よりも、こうした歳時記構成上の都合が優先された結果であると思われるのである。

### 三・三 晩秋の「冷やか」

「冷やか」を晩秋とする代表は一連の秋桜子編歳時記である。次は昭和十三年（一九三八）刊の『新選俳句季語解』（交蘭社）の秋桜子自身による「冷やか」解説である。

秋の暁や夕暮などに受ける感じで、身にしみて冷え冷えするような気持をいう。一二の例をあげて見ると山の温泉宿で朝早く起き、四山の霧をながめながら筧の水に手を浸して見ると実に冷い感じがする。又夕暮に森の小径を逍遙して日影のすでに失せた杉の根元に竜胆の咲きのこっているのを見ると、やはり冷たい感じを受ける。

こういうのが「冷やか」である（略）。

この時、彼はまだ「冷やか」を晩秋とは明記してないが、

「身にしみて冷え冷えする」、「冷たい」、「竜胆（仲秋）の咲きのこる」などの部分に晩秋の感じが彷彿としている。

そして、昭和二十六年（一九五一）刊の秋桜子編『新編歳時記』（大泉書店）で「冷やか」は明確に晩秋に区分される。傍題は改造社版『俳諧歳時記』などに同じの「ひゆる」、「ひやひや」、「下冷」、「秋冷」、「朝冷」、「雨冷」。次は篠田悌二郎による解説である。

秋も十月近い頃ともなれば、涼しいというより冷え冷えと身体に感じるものが多くなる。殊に雨の降る日など、その感が深いものである。然し寒いという程でもなく、例えば秋涼とやや寒の中間のものと考えればよい。

興味深いのは、区分は晩秋であるのに「秋涼（同歳時記で初秋）とやや寒（同じく晩秋）の中間のもの」との解説は正に仲秋で、先の山本健吉の解説に大分近いことである。また、次はこの改訂版である昭和五十三年（一九七八）刊『現代俳句歳時記』（大泉書店）における福永耕二の解説である。

晩秋、手足や皮膚に触れたものの冷やかなことをいう。秋の初めに涼しく感じられた風も、十月末ごろから次第に冷たく感じられるようになる。風だけでなく、素足に踏む板の間や畳の感触もひえびえとしてくる。涼しさと寒さの中間というより、やや寒さに近い感覚といえよう。

ここでは「冷やか」の時期も感覚も解説が明らかに修正され、晩秋に相応しいものとなっている。これが秋桜子の意向によるものか、篠田悌二郎と福永耕二の感覚の相違であるの

かは定かではないが、正に人それぞれということである。

そして、秋桜子の没後、平成十三年（二〇〇一）刊の水原春郎編『馬酔木季語集』では解説文がなく明確ではないが、その配置などを見ると「冷やか」は仲秋としてしていると推定される。恐らくは、今日一般の趨勢に合わせたものであろう。

### 三・四 冬の「冷やか」

晩秋の「冷やか」があるなら、続く初冬あるいは冬の「冷やか」があっても不思議はない。季節区分はそんなに厳密なものではない。人、地域、時代などにより多様であることはこれまで述べて来た通りである。まず具体例を二つ挙げる。文中「紅葉散る」は初冬、「新雪」は三冬の季語である。

夕冷えの乱るる靴に愉しき灯 飯田 龍太

昭和四十一年晩秋初冬のころ、京都の『雲母』俳人たちの句集出版の会に出席した。「水澄みて旅路急せきかるるにもあらず」の一句があるとおり、気楽なひとり旅。その日、紅葉散り敷く大原の寂光院近くの宿に泊まった。そのとき、大阪の親しい俳友が重患の床にあることを知った。見舞って家路につくと、甲斐（山梨県）の山々は新雪をいただいていた。（飯田龍太「あの頃」『北陸・京滋ふるさと大歳時記』角川書店）

津山冷ゆ石の三鬼に会ひに来て 山口 誓子

「冷やか」は近世の歳時記では初秋とするものが多いが、晩秋の、涼しいというよりひえびえとした感じも含めてよい。山口誓子の「冷ゆ」を季語とする掲出句は昭

和三十七年、この年逝去した西東三鬼の墓（岡山県津山市）に詣でて詠まれたが、初冬十一月の作である。細長い日本列島、季節も時候的なものは一律の感覚ではゆくまい。（佐藤道明「秋冷」解説『中国・四国ふるさと大歳時記』角川書店）

また、次は表2の近現代歳時記より抽出した例句である。

初冬 背筋冷ゆ一言波郷死すと嗚呼 石塚 友二

（「波郷忌」は十一月二十一日。）

三冬 絨緞を敷きて冷えきる天守閣 山口 誓子

三冬 いち早く冷えよぶ紙を漉きかさね 能村登四郎

三冬 入日の冷え家のそここ母の咳せき 大野 林火

三冬 サツカーの声援の辺に冷えゐたり 八木林之助

（「サツカー」は『角川俳句大歳時記』に掲出はないが、

一般に三冬。）

以上の句に特徴的なのは、全てが「冷え」、「冷ゆ」であることである。表1の近世歳時記で、享保二年（一七一七）の『通俗志』から「冷やか」を初秋、「ひえる」を三秋とするものが散見される。既にこの時代から「ひえる」は「冷やか」より秋の深まった季節のものという認識があったのである。

三・五 角川版歳時記の「冷やか」

前項で触れた『ふるさと大歳時記』や季寄せ類と共に、角川書店はこれまで数々の歳時記を刊行している。その最初は昭和三十年（一九五五）刊の角川文庫版『俳句歳時記』で、約一年後の合本版共々、現在は平成十九年（二〇〇七）刊の

第四版まで出ている。

また、大歳時記では名編の誉れ高い昭和三十九年（一九六四）刊『図説俳句大歳時記』と、その後継である平成十八年（二〇〇六）刊『角川俳句大歳時記』がある。

興味深いのは、これらの歳時記における「冷やか」の季の相違である。まず角川文庫版『俳句歳時記』初版では「冷やか」解説は晩秋、傍題は「ひゆる」、「秋冷」である。角川書店編とある一方で「はしがき」や奥付の上部には編者として秋元不死男、原田種茅、志摩芳次郎の名が明記されている。

晩秋になると朝夕は冷え冷えしてくる。雨が降ったりすると一層その感が深い。畳に坐るとひんやりする。「朝冷」・「夕冷」・「雨冷」その他用い方は頗る広い。

次に『図説俳句大歳時記』であるが、こちらは近世以来の伝統的な初秋区分であり、傍題は改造社版『俳諧歳時記』などと同じの「ひゆる」、「ひやひや」、「下冷」、「秋冷」、「朝冷」、「雨びえ」で次の解説がある。前半は「冷やか」を仲秋とした虚子編『新歳時記』解説に同じであるが、後半の「そんなことに」以下は初秋の感を表したものである。

秋になって感じる冷やかさである。石の上や、板の間などにふと感じるつめたさであり、そんなことに「秋になつたな」とうなずく思いである。（大野林火）

同編の「本巻協力者」「解説執筆者」欄に先の志摩芳次郎の名前はないが、秋元不死男、原田種茅は同じく名前を連ねている。勿論、大会社の大事業であるから、同じ角川書店編の

歳時記で年次も僅か九年後でもスタッフは異なり、この程度の相違は当たり前なのかも知れないが、「冷やか」の季節区分がこのように異なる。

その後、角川文庫版『俳句歳時記』は編者の名前が明記されなくなり、傍題、例句も変遷を見せるが、第三版まで解説に顕著な変化はなかった。ところが最新の第四版では「秋になつて肌に覚える冷気である。」とだけの解説になり、明らかに最近の趨勢である仲秋あるいは三秋に移行した感がある。傍題は「冷ゆ」、「秋冷」で初版に戻っている。

一方、『図説俳句大歳時記』後継の『角川俳句大歳時記』でも「冷やか」の季は初秋から仲秋へと変化を見せる。傍題は従来と同じ、次の解説は山本健吉と同様のものである。

秋になつて肌に直接覚える冷気、冷やかさである。石に触れたり、板の間に素足で降りたときに、ふつと感じる。感覚的には「新涼」よりも本格的な秋の気配があり、かつ「うそ寒」や「やや寒」ほど深まっていない頃の季語である。（細谷暁々）

文庫版と大歳時記に同時起こつたこの変化は、恐らくは編集・発行が角川学芸出版となつたことを契機とした大幅な見直しによるものであり、見直し自体はたいへん意義深いことである。しかし、スペースの限られた文庫版は兎も角として、大歳時記の方には「冷やか」の季の改変について何等かの説明があつて然るべきではないか。前身の『図説俳句大歳時記』が世に知られた名編であるだけに、尚更そう思う。

序でに言へば、前節の「昼寝の巻」で述べた「三尺寝」解説が『図説俳句大歳時記』では正しくなされているのに、後継の『角川俳句大歳時記』では誤った解説となっている。しかも、その考証欄には『俳諧季寄大全』の「三尺寝」といふは、日影三尺寝ることぞ」との一節が明記されている。解説執筆者、編者は前身の『図説俳句大歳時記』のみならず、自著の考証欄さえ参照していないのであろうかと思つてしまふのである。

### 三・六 夏の「冷やか」

素外は『句鑑附篇』に芭蕉の句「ひやひやと」を「昼寝」を季題として夏の部に入れた。彼はそのことを文化十年（一八一三）刊の『玉池雜藻』（\*12）で次のように弁明する。

昼寝 円機活法夏之部に出。但其書に載る所の事実、夏のみにもあらず。されど先年浪華同流故馬城が点には夏に取しを見し也。是活法に寄し歟。此地にては自他とも季節の沙汰なし。又、桃青句に、残暑の心をと前書して、冷冷と壁を踏えて昼寝哉。是冷の字を以秋にせしなれば難なし。されど壁をふまへ、心持よき趣にては冷やかを賞美也。桃青は真の隠士にて名聞の意なく、只思ひ寄所を述たるが、冷物を賞翫するは氷水・冷汁・煮ひやし等六月也。爰を以思へば、右翁が句は夏の方感深かるべしと、先年句鑑附篇を著述の時、夏之部に入たり。いにしへより撰集にも此類ある事也。又拾遺集に、安法法師秋の初めに、夏衣まだ単なるうたた寝に心してふけ

秋の初風。此哥、ひとへ衣の転寝はいまだ夏の形成べし、よて秋風に心してふけといとひしにや。昼寝・うたた寝、打出さねど心には夏をふくめる句有べし。句作により季節の事は衆議判に寄歟。

『円機活法』は中国明代に出た作詩者のための書で、『拾遺集』は古今・後撰に次ぐ『三代集』の最後に当たる勅撰和歌集「拾遺和歌集」である。また、「いにしへより撰集にも此類ひある」とは、やはり芭蕉の句を夏の部に入れた元禄十一年（一六九八）刊の風国編『泊船集』などを指すのであろう。

文中の「昼寝 円機活法夏之部に出。但其書に載る所の事実、夏のみにもあらず。」は前節「昼寝の巻」で述べた「昼寝は夏に限らない」ということに合致しており、「此地にては自他とも季節の沙汰なし。」はその時代における「昼寝」の季語としての認知度の低さを良く表わして興味深い。

また、「句作により季節の事は衆議判に寄歟。」との一節はその例が「秋風」であるだけに尚更、先の「新歳時記考序説」で紹介した大須賀乙字の「俳句に詠せられてこそ季語ともなるが、一語とり放つて『秋風』といつても季語とはしないのである。」（「季感象徴論」\*13）との論を彷彿とさせる。

次に、表2の近現代歳時記より夏の季語があり、夏の季感がある「冷やか」例句を抽出してみる。中には秋の句とした方が良いものもあるかも知れないが、少なくとも全部ではない。夏の「冷やか」が確かに存在しているのである。

三夏 滝冷やか生きて濁りてゆく眼には 平畑 静塔

三夏 土間冷えて鮎あなずしなどもしてありぬ 橋本 鶏二

三夏 帰らなん汗の耕馬が夕冷ゆる 小池 奇杖

三夏 布を晒す水ひややかに流れけり 高井 墨公

三夏 冷かに燭蛾とまりぬ膝の上 高橋淡路女

晩夏 ひややかに西日さす水流れけり 榎山 梓月

晩夏 注ぎわけて梅酒とろりと山の冷え 中村 汀女

晩夏 一ト夜さの冷えや紅濃き籐草 池田みち子

また、次は伊東静雄の詩であるが、その中に実に印象的な

夏の「ひやひや」がある。  
「七月二日・初蟬」 伊東静雄

あけがた

眠からさめて

初蟬をきく

はじめ

地虫かときいてゐたが

やはり蟬であった

思ひかけず

六つになる女の子も

その子のははも

目さめゐて

おなじやうに

それを聞いてゐるので

あつた

軒端のそらが

ひやひやと見えた

何かれらに

言つてやりたかつたが

だまつてゐた

俳句の言葉と詩や短歌のそれとは違うという俳人がいる。

しかし、それは俳句が他の文芸から遊離し、孤絶し、墮して

行く愚かな第一歩である。と、私などは思うのである。

三・七 無季の「冷やか」

「冷やか」に無季の用例があることを知ったのは、平成十一年（一九九九）刊『カラー版新日本大歳時記』（講談社）の

「冷やか」解説に次の作品（星野立子第六句集『実生』所載、

昭和二十五年作）が紹介され、「感覚でとらえた季語なので心理的にも使われる。」とあつたのが最初である。

冷やかな性さがとは知れどなさげなく

星野 立子

早速、昭和九年（一九三四）刊の虚子編『新歳時記』を見てみたが、初版から増訂版に至るまで「冷やか」に無季らしい用例はない。ところが、昭和六十一年（一九八六）刊の稲

畑汀子編『ホトトギス新歳時記』になると、

人冷やか追ひすがらんとする我に

野村 久雄

身の上に法冷ひややかに来りけり

高浜 虚子

の二句、更に平成八年（一九九六）の改訂版では、

人を見る眼の冷やかに女因病む

河野 探風

冷やかに掛る面会謝絶札

一宮 十鳩

今日明日のいのちと告ぐるひややかに

瓦 玉山

冷やかに白紙答案現るる

糸野 福民

冷やかに停年の肩ありにけり

星野 椿

の五句が加わり、「冷やか」の用例八句中、七句までが無季の趣である。「面会謝絶札」、「白紙答案」、「停年の肩」などはまだ具象があり、無季ではないと言うことも可能であるが、他の句はどう見ても明らかに無季である。

また、『虚子五句集』（\*10）には右掲のもの他に、

冷やかや返事が来ねばそれまでと

高浜 虚子

冷やかにその行末を見守りぬ

〃

と何れも昭和二十八年（一九五三）の作があり、先の「身の上」の句は昭和十二年（一九三七）の作となっている。即ち、「ホトトギス」では少なくともこの時期から無季の用例が認められていたことになる。

勿論、こうした使い方は「ホトトギス」に限らず、ごく一般的に行われているようで、昭和二十六年（一九五一）刊の秋桜子編『新編歳時記』には、「冷やか」解説に「形容詞に、副詞に、このように自在に使える。」とあり、他の多くの歳時記にも同様の記述がある。

実際、表2の近現代歳時記より無季の用例を抽出してみると沢山出て来る。それらの中には無季とも有季とも判断が付き難いものが大分あり、掲出した中にもそういうものはある。それ位、線引きは困難である。

強いて言えば、先に述べたような具象や、「冷やかや」と切字のあるものなどは、作者の真意は別にして、無季ではない

と言える余地がある。次は概ね無季の趣が深い順に挙げてあるが、全二十一句の内、その過半は明らかに無季である。

どこかひやかか紺紙金泥の経の文字

坂 扇楼

銀よりも金は冷やか金閣寺

藤崎 久を

ひやひやと臍腑まさぐる超音波

中村 弘

火の山にたましひ冷ゆるまで遊ぶ

野見山朱鳥

諸とのみ冷やかなれどたのもしく

松尾いはほ

冷やかに物言ふ湯女の釣眉毛

古川 芋蔓

冷やかにただ一言の美しき

橋本 鶏二

冷やかにわれを速くにおきて見る

富安 風生

冷かに目の奥を歩みいたりけり

加藤 楸邨

わが老いを瞑りて見る冷やかに

相馬 遷子

何時かは来るその古稀が来て冷やかに

石塚 友二

冷やかに死があり生きて老後あり

梶山 鉄舟

冷かに眼鏡の似合ふ妻となりぬ

村尾菩薩子

冷やかに受診の舌を突きだせり

井口やよい

冷かに壺をおきたり何も挿さず

安住 敦

冷やかに裏向けられて落選画

神谷つゆ子

改札より潜水艦の見えて冷ゆ

田中 貞雄

冷やかや夫婦にもある他人事

竹内大琴子

冷かや笑みても真顔いつもあり

池内友次郎

あな冷やか狐が狐舎にひとつづつ

水原秋桜子

冷やかに海を薄めるまで降るか

権 未知子

#### 第四節 結語

言葉が歳時記に掲出され季語になるということについて考えてみる。昭和を中心に、明治・大正・昭和の時代に新しく誕生した季語について考察を施した山下一海『昭和歳時記』の「はしがき」に次のような一節がある。

芭蕉が「季語の一つも探り出したらんは、後世によきたまもの賜」といったことはよく知られているが、それは探しだしてくればいいというものではない。もの珍しさでただ新しい語をあしらったというようなことでは、季語は成立しない。その語の本意・本情、つまりは本質を知り抜き、それを正面から作品の上に生かすきって佳句を生み出し、十分に人々の共感を得たときのみ、新しい季語は誕生する。一人の力をきつかけとすることはあつても、それだけで季語は確立するものではない。そこに多くの人の力と長い時間が増えられることによって、はじめて文芸の大きな意志が動き、季語は成熟する。

これを人の面からではなく言葉の面から言えば、言葉が季語として成立するためには、その言葉がそれだけ人々の生活と深く係わり、人々の共感を得るだけの本意・本情、つまりは本質を持ち、多くの人の力と長い時間が増えられるだけの魅力を持った「力のある言葉」でなければならぬということである。権未知子が自らの著作に「季語の底力」、「季語の引力」などというタイトルを用いるのも、その辺の所を意識

したものであろう。問題は、そうした「季語の力」は季節との係わりに、その本質があるのかということである。

言葉というものは人々の生活とまぎ深い係わりを持つ。そして、季節の移ろいの中で日々営まれる人々の生活は季節全体と深い係わりを持つ。広く言葉は季語も含め、人々の生活との係わりが第一義であり、そこに言葉の力の源がある。言葉と季節との係わりはそのことを通しての二義的なものであり、また、それは特定の季節には限らない。物象感の軸を第一義とする歳時記が望まれ、提唱される所以である。

最近、無季語を掲出した歳時記が少しずつ出て来ているが、こうした語においても人々の生活と深い係わりを持った「力のある言葉」でなければ「もの珍しさでただ新しい語をあしらった」というようなことでは詩語として成立しない。そして、力のある言葉に有季、無季の差など本質的でない。

芭蕉の名句「ひやひや」とに係わる二つの季語「昼寝」、「冷やか」は現在、元来の季節を中心としながら、広く他の季節、そして無季（通季、通年と言い換えても良い）にまでその用例の領域を拡げていることを前節までに述べた。それは、それらの言葉が人々の生活との係わりが第一義で季節との係わりは二義的なものであることの表れでもある。

季節との係わりだけ、ましてや、ただ一つの季節との係わりだけでその本意・本情、本質が成立している言葉など皆無である。先の「新歳時記考序説」で述べたように、渡辺白泉は、季語は「季節を表現するという特殊的作用を有するのみ

ならず、更に季感に非ざる諸他の感覚又は感情を表現するという一般的作用を有している。」（季語の作用と無季俳句上）「句と評論」昭和十年九月号）ということを描し、それをベースに季語制度の崩壊にまで言及した。

現行の歳時記では、言葉が季語として掲出される最初の過程で、その言葉とある特定の季節との係わりがまず抽出され、その季節に分類区分され、歳時記に収められることになる。そして、一旦歳時記に収められたその後は当初の本意・本情だけに拘泥せず、自由自在にその用例がなされて行く。

季語が季節との係わりを単に一季節に限らない広い範囲、更には無季にまでその用例を拡げて行く過程は、山下一海『昭和歳時記』の「はしがき」にあるように、多くの俳人たちがその力と長い時間を掛けて季語の本意・本情、本質を知り抜き、作品の上に生かし切り、季語を成熟させて行く過程でもある。ここに言う本意・本情、本質とは歳時記に記された建前上のもではなく、もっと根源的なものである。そして、ここにおいて季語制度は正に完全に崩壊している。

また、歳時記においては、そこで規定された季節が季感となる。それに寄り掛かっただけの作品が量産される一方で、他の季感や無季で詠んだ句でも自動的に歳時記の季節が適用されてしまう。しかも、歳時記によってその季節が異なる。季節感の軸を第一義とする現行の歳時記はこうした多様な季節の用例にはそぐわない構成であり、これもまた完全に崩壊しているのである。

しかし、季語にこうした一つの季節に限らない無季をも含めた多様な広い範囲の用例が既にあることは「無季有季俳句融合の理想境」実現へ向けて、むしろ非常に心強い。

平成十九年（二〇〇七）に「テーマ」という物象軸で言葉を再構成した權未知子著『言葉の歳事記』、平成二十年（二〇〇八）には子規から現代までの有季、無季の名句をテーマ別のキーワードで分類した片山由美子・權未知子編『覚えておきたい極めつけの名句一〇〇〇』が出た。物象軸を第一義とする新しい歳時記に向けての大きな第一歩である。

芭蕉の『おくのほそ道』が元禄七年（一六九四）、蕪村追善の『蕪村句集』が天明四年（一七八四）、子規の『俳諧大要』が明治三十二年（一八九九）と俳諧の世界は百年ごと大きな節目を迎えている。今年はそのから丁度百年目である。新しい時代の胎動がもう始まっているのかも知れない。無季俳句は良い作品が少ないと言う。しかし、それは季語と無季語の数の差、また、それに係わる俳人の数の差による見掛け上のものである。

ことばは、置いてあるだけでは命を持ちません。人が使うことによって、ことばは初めて力を持ち、みずみずしい光を放ちます。（『言葉の歳事記』「はじめに」）

多くの力のある俳人たちが、これまでただ「置いてあるだけ」の力のある言葉を有季、無季に拘わらず、どんどん使うことによって、沢山の言葉は初めて力を持ち「みずみずしい光」を放って来るのではないだろうか。

表1 近世歳時記における「冷やか」の季

書名	分類	刊稿年	西暦年	編著者等	「冷やか」の季
連歌至宝抄	連歌論書	天正一四成	一五八六	紹巴著	「初秋」区分
匠材集	連歌辞書	慶長二跋	一五九七	紹巴跋	「秋さむき事」と解説
無言抄	連歌式目書	慶長八頃刊	一六〇三	宍其著	「秋」
はなひ草	俳諧作法書	寛永一三自奥	一六三六	立圃編	「初秋」区分
俳諧初学抄	俳論書	寛永一八自跋	一六四一	徳元著	
毛吹草	俳諧撰集・辞書	正保二刊	一六四五	重頼編	「初秋」区分
山之井	季寄	正保四成	一六四七	季吟著	
俳諧御傘	俳諧式目書	慶安四刊	一六五一	貞徳著	「初秋の事なり」と解説
増山井	季寄	寛文七刊	一六六七	季吟著	「初秋」区分
俳諧無言抄	俳諧作法書	延宝二刊	一六七四	梅翁著	「初秋也」と解説
増補はなひ草	俳諧作法書	延宝六刊	一六七八	不詳	「初秋」区分
詠諧番匠童	俳諧作法書・季寄	元禄二刊	一六八九	和及著	「初秋」区分
詠諧をだまき	俳諧作法書	元禄四刊	一六九一	竹亭著	「初秋」区分
俳諧大成新式	俳諧作法書	元禄一刊	一六九八	鷺水編	「初秋」区分
滑稽雑談	季寄	正徳三序	一七一三	其諺著	「初秋」区分
通俗志	俳諧作法書	享保二序	一七一七	員九(胤及)著	「初秋」。三秋に「ひえる」
其傘	俳諧作法書	元文三自序	一七三八	貞山著	「初秋」。三秋に「ひえる」
改式大成清鈔	俳諧辞書	延享二以前刊	一七四五	不角著	「初秋」区分
詠諧手挑灯集	俳諧作法書・句集	延享二跋	一七四五	貞山著	「初秋」区分
俳諧四季部類	季寄	安永九刊	一七八〇	じり柳著	「初秋」区分
華実年浪草	季寄	天明三刊	一七八三	龜文著	「初秋、三秋」。三秋に「冷」

新歳事記	書名	発行	初版	西暦年	編著者等	「初秋」区分 「冷やか」の季
俳句新歳事記	大学館	明治三六	一九〇三	大江濤敏編	「初秋」区分	
俳諧例句新撰歳事記	博文館	明治三七	一九〇四	寒川鼠骨著	「初秋の気候の冷気を覚ゆるを云う」	
新修歳時記	俳書堂	明治四一	一九〇八	今井柏浦編	「初秋のことにて、稍冷気を覚ゆる」	
俳句資料新撰歳時記	国文館書店	明治四五	一九一二	中谷無涯編	「初秋」区分	
懸葵季寄せ	懸葵発行所	大正一二	一九二二	田山白人著	「初秋にても暮秋にても同じ」	
新校俳諧歳事記	修省堂	大正一四	一九二五	沼法量編	「秋」	
詳解例句纂修歳事記	修省堂	大正一五	一九二六	今井柏浦編	「初秋」区分	
昭和最新俳句歳事記	星文閣	昭和二	一九二七	宮田戊子著	「初秋に用うべし」	
最新俳句歳事記	平凡社	昭和五	一九三〇	小泉迂外著	「初秋」区分	
俳諧歳時記	改造社	昭和八	一九三三	松瀬青々編	「初秋の気候の冷かなることをいう」	
新歳時記	三省堂	昭和九	一九三四	高浜虚子編	「初秋」区分	
改訂版	〃	昭和九五	一九四〇	〃	「仲秋」区分	

表2 近現代歳時記における「冷やか」の季

俳諧小笠	季寄	寛政	六刊	一七九四	八悟著	「三秋」区分
俳諧歳時記	歳時記	享和	元序	一八〇一	曲亭馬琴編	「兼三秋」
改正月令博物筌	季寄	享和	二序	一八〇二	不二庵(二柳)序	「初秋」区分
季引席用集	俳諧辞書	文化	五刊	一八〇八	洞斎著	「初秋」区分
季寄新題集	季寄	文政	元序	一八一八	存義遺稿	「初秋」。三秋に「ひえる」
増補改正俳諧歳時記葉草	歳時記	嘉永	元刊	一八四八	千艸園著	
		嘉永	四刊	一八五一	藍亭青藍編	「初秋」区分



最新俳句歳時記	文春文庫	昭和五二	一九七七	山本健吉編	〔仲秋〕区分
雪解俳句歳時記	東京出版	昭和五二	一九七七	皆吉爽雨編	〔仲秋〕区分
新編俳句歳時記	講談社	昭和五三	一九七八	清崎敏郎編	〔仲秋〕区分
カワー図説日本大歳時記	講談社	昭和五六	一九八一	山本健吉他監修	〔仲秋〕区分
基本季語五〇〇選	講談社	昭和六一	一九八六	山本健吉著	〔仲秋〕区分
天狼俳句歳時記	本阿弥書店	昭和五九	一九八四	山口誓子監修	〔仲秋〕区分
草田男季寄せ	萬緑発行所	昭和六〇	一九八五	萬緑運営委員会編	〔秋〕
ホトトギス新歳時記	三省堂	昭和六一	一九八六	稲畑汀子編	〔仲秋〕区分
〃	〃	平成八	一九八八	稲畑汀子編	〔仲秋〕区分
作句歳時記	講談社	昭和六三	一九九六	楠本憲吉編著	〔仲秋〕(推定)
新歳時記	河出文庫	平成元	一九八九	平井照敏編	〔仲秋〕(推定)
現代俳句歳時記	千曲秀版社	平成元	一九八九	金子兜太編	〔秋〕
ふるさと大歳時記	角川書店	平成三	一九九一	山本健吉監修	〔秋〕
現代歳時記	成星出版	平成九	一九九七	金子兜太他編	〔仲秋〕区分 (本文参照)
合本現代俳句歳時記	角川春樹事務所	平成一〇	一九九八	角川春樹編	〔仲秋〕(推定)
山暦俳句歳時記	邑書林	平成一一	一九九九	青柳志解樹監修	〔秋〕
カワー版新日本大歳時記	講談社	平成一一	一九九九	飯田龍太他監修	〔仲秋〕区分
新版・俳句歳時記	雄山閣	平成一三	二〇〇一	桂信子他編	〔秋〕
季寄せ	NHK出版	平成一三	二〇〇一	平井照敏編	〔仲秋〕区分
馬酔木季語集	ふらんす堂	平成一三	二〇〇一	水原春郎編	〔仲秋〕(推定)
現代俳句歳時記	学習研究社	平成一六	二〇〇四	現代俳句協会編	〔仲秋〕(推定)
ザ・俳句歳時記	第三書館	平成一八	二〇〇六	有馬朗人他監修	〔秋〕
角川俳句大歳時記	角川学芸出版	平成一八	二〇〇六	角川学芸出版編	〔仲秋〕区分
続氷室歳時記	邑書林	平成一九	二〇〇七	氷室同人会編	〔秋〕

参考文献（既出のものは省略あり）

- \* 1 『蕉門俳諧集一』阿部喜三男・阿部正美・大磯義雄校注、古典俳文学大系6、昭和四十七年（一九七二）、集英社
- \* 2 『穎原退蔵著作集7』穎原退蔵著、昭和五十四年（一九七九）、中央公論社
- \* 3 『全釈芭蕉書簡集』田中善信注釈、平成十七年（二〇〇五）、新典社
- \* 4 『松尾芭蕉集2』井本農一・久富哲雄・村松友次・堀切実校注・訳、新編日本古典文学全集71、平成九年（一九九七）、小学館
- \* 5 『蕉門俳論俳文集』大磯義雄・大内初夫校注、古典俳文学大系10、昭和四十五年（一九七〇）、集英社
- \* 6 『芭蕉俳句の解釈と鑑賞』志田義秀著、昭和十五年（一九四〇）、至文堂
- \* 7 『三尺寝』『穎原退蔵著作集16』穎原退蔵著、昭和五十五年（一九八〇）、中央公論社
- \* 8 『昼寝のすすめ―短時間睡眠の不思議』井上昌次郎監修、平成八年（一九九六）、家の光協会
- \* 9 『快適睡眠のすすめ』堀忠雄著、平成十二年（二〇〇〇）、岩波新書
- \* 10 『虚子五句集（上・下）』高浜虚子作、平成八年（一九九六）、岩波文庫
- \* 11 『詩歌連俳季寄註解改正月令博物筌』鳥飼洞齋著、明治四十年（一九〇七）、求光閣書店
- \* 12 『近世俳話句集』日本俳書大系14、昭和二年（一九二七）、日本俳書大系刊行会
- \* 13 『大須賀乙字俳論集』村山古郷編、昭和五十三年（一九七八）、講談社学術文庫
- \* 14 『星野立子全集第一巻・俳句I』星野立子著、平成十年（一九九八）、梅里書房
- \* 15 『昭和歳時記』山下一海著、平成二年（一九九〇）、角川選書
- \* 16 『言葉の歳事記』權未知子著、平成十九年（二〇〇七）、日本放送出版協会
- \* 17 『覚えておきたい極めつけの名句一〇〇〇』角川学芸出版（片山由美子・權未知子）編、平成二十年（二〇〇八）、角川学芸出版

# 海女沈む

前田霧人

## 第一節 高浜虚子

海女沈む海に遊覧船浮む

高浜 虚子

昭和二十三年（一九四八）四月四日、虚子は「伊勢玉藻会」、「伊勢砦会」合同の句会で三重県四日市市の奥座敷、湯の山温泉に赴いた後、七日、八日と伊勢・志摩を周遊した。

この句はその時のもので「海女」の句は、

春潮や小ぢうといへる海女沈む

高浜 虚子

海女とても陸こそよけれ桃の花

の二句が同時に作られている（高浜虚子「句日記」「ホトトギス」昭和二十四年四月号）。

この旅は「伊勢山田の守武四百年祭に行く序に四日市市で会を催すから、是非立ち寄って呉れんかとの事で行くことになった」（高浜虚子「天ヶ須賀海岸」「ホトトギス」昭和二十三年十一月号）ものである。

同市の天ヶ須賀海岸には山口誓子が久しく病氣療養中で、これはその誓子を見舞う旅でもあった。

海に出て木枯帰るところなし

山口 誓子

炎天の遠き帆やわがこころの帆

『遠星』所載のこの名句は、誓子が昭和二十一年五月に天ヶ須賀海岸に移る少し前の昭和十九年と二十年、同じ四日市市の富田在住中に作られたものである。

虚子の「海女」の句、第一句と第三句は『六百五十句』に所載されている。第一句には「海女」以外に季語がないが、虚子編『新歳時記』の初版から増訂版、虚子編『季寄せ』の初版から改訂版に至るまで「海女」は季語となっていない。

そのためであろうか。『五百句』から『七百五十句』までを収録した『虚子五句集』（岩波文庫）で「ホトトギス」の人々の全面的な協力により作成されたとされる「季題索引」にも「海女」は「季題」として掲出されていない。

「ホトトギス」では歴代、『雑詠全集』、『雑詠選集』なるものが刊行されている。それらを参照すると、昭和三十七年（一九六二）刊の高浜年尾編『虚子選ホトトギス雑詠選集』（昭和十二年十月号から昭和二十年三月号までの雑詠）には「海女」は季語となっていないが、昭和五十三年（一九七八）刊の高浜年尾編『年尾選ホトトギス雑詠選集』（昭和二十六年三月号から五ヶ年分の雑詠）では「海女」は四月（晩春）の季語となっている。

昭和二十六年三月号より「ホトトギス」雑詠選者は虚子から年尾へと正式に継承された。右の両書は「ホトトギス」に連載の「雑詠選集予選稿」を編纂したものであるが、虚子は予選稿の完成を果たせないまま、昭和三十四年に他界した。

両書が共に年尾編であり、選抜された「ホトトギス」の号にブランクがあるのはそのためであるが、先の虚子の句は丁度その間のものである。そうであれば、両書間のブランクの時期、昭和二十年から二十六年まで七年間の「ホトトギス」雑詠にある「海女」の句を全部調べるしかない。結果は多少見落としがあるかも知れないが、凡そ次の通りである。

表1 「ホトトギス」雑詠にある「海女」の句数

年	「海女」以外に季語がある句	「海女」以外に季語がない句	計
昭和二〇年	六	〇	六
昭和二二年	一八	〇	一八
昭和二三年	二三	〇	二三
昭和二四年	三四	三	三七
昭和二五年	五一	七	五八
昭和二六年	七二	二八	一〇〇
	八九	二〇	一〇九
計	二九三	五八	三五一

この間、「ホトトギス」の休刊は昭和二十年六月号から九月号までの僅か四カ月間である。戦中戦後のこの未曾有の時代に海女の営みが続けられ、俳人たちが詠み、「ホトトギス」が作品を掲載し刊行を続ける。戦後生まれの私は改めてこの時代を生きた人々の営みに驚嘆してしまつた。

表1で「海女」以外に季語がない句が初めて出た年は昭和二十三年、作品は九月の二句、十月の一句を合わせた三句で、作者は何れも伊勢、南伊勢の人である。

虚子が伊勢・志摩を訪れ「海女」の句を詠んだのは同年四月である。雑詠の投句から掲載までの期間を考慮すると、現地句会等での虚子の句や言を以て「海女」が「ホトトギス」で季語として是認されたことが、これでは明白である。

表1を見れば、昭和二十五年には「海女」が季語として定着しつつあったことが分かる。しかし、昭和二十六年十月刊の虚子編『新歳時記』増訂版で、改訂版で増補した「熱帯季題」の削除などがなされたが、「海女」は新題として採用されなかった。この時点で「海女」を季語とする歳時記はまだなかった。時期尚早と、虚子は見たのであろうか。

次の表2、表3は上記七年間に「海女」以外の季語で海女を詠んだ句を十六のテーマで各六句の計九十六句、全二九三句中のほぼ三句に一句を選出したものである。

これらを見ると、僅か七年間の作品であるにも拘わらず、海女を取り巻く海や空、動物や植物、生活や行事に係わる多様な季語により、四季における海女の様々の姿や生活が実に生き生きと描かれ尽くされている。(季節区分は『角川俳句大歳時記』に準拠、以降も同様である。)

また、その次の頁は同じ七年間に詠まれた「海女」以外に季語がない全五十八句から約四十句を選定し、テーマ別に掲げたものである。







表2、表3の句と比べると「渡り海女」の句を除き、全体に季感というものが希薄である。そのことは同様のテーマである「初」と「稽古海女」、「乳」と「育児・家事」の句を比べてみれば良く分かる。先の虚子編『新歳時記』増訂版で「海女」が新題として採用されなかったのは、虚子もまたそのことを如実に感じ取っていたのかも知れない。

しかし、「海女を取り巻く海や空、動物や植物、生活や行事に係わる多彩な季語」を全て取り去った「海女」の句に季感が希薄なのはむしろ当然である。

潮干の 三津の海女の くぐつ持ち

玉藻刈るらむ いざぎきて見む 角麻呂

このように「海女」は『万葉集』（巻第三・二九三）にも、一首だけであるが詠まれている。「三津」は難波の三津、「くぐつ」は莎草（かやつりぐさ）で編んだ袋で、藻または貝などをに入れるのに用いるもの（『広辞苑第四版』）である。

古く『万葉集』に詠まれ、歌麿や北斎の浮世絵にも描かれた「海女」（\*3）が戦後の昭和まで季語とならなかつたのは「海女を取り巻く多彩な季語」により海女を存分に詠むことが出来たからであり、その必要がなかつたのである。

しかし、「海女」を季語とした前頁の句もまた、海女の姿を的確に捉え、それぞれに佳句となつている。それは「海女」という言葉に力があるからである。

「ホトトギス」において「海女」が正式に季語となるのは、昭和六十一年（一九八六）刊の稲畑汀子編『ホトトギス新歳

時記』であるが、何故かその季は夏（三夏）で、四月（晩春）に詠まれた先の虚子の句は例句として選ばれていない。

こうして「ホトトギス」で最初に「海女」を季語として詠んだ虚子の作品は、後に他の歳時記には春季（晩春）の「海女」例句として掲載されるが、「ホトトギス」においては現在に至るまで無季の扱いを受けたままになっているのである。

## 第二節 橋本鶏二

二・一 沢木欣一第二句集『塩田』

昭和三十年代前半、印象的な「海女」の句を所載する三編の句集が相次いで刊行される。昭和三十一年（一九五六）刊のこの句集には「俳句」昭和三十年十月号巻頭に掲載された大きな反響を呼んだ群作「能登塩田」が収められ、そこに能登塩田を詠んだ二十五句に続いて「輪島海女部落 一〇句」と前書きされた実に印象的な夏の「海女」の句がある。

輪島海女部落 一〇句 沢木 欣一

炎の海難民のごと海女の群れ

舟板に重なる裸鍋釜も灼け

舟より乳飲児捧げ受く指炎立つ

海女の女体裸子羽交に静まるよ

夕日沖へ海女の乳房に虻喰り

生活の海海女指股にえご血色

岩壁の傾斜のままにえご敷きつめ

吾が教え子濡れ身の海女に物いうも

海女昼寝牡蠣割刀を爪先に

鉄気井戸夕ぐれどきの海女の尻

「えご」は「恵古苔」（三夏）で、「虻」（三春）以外は「昼寝」（三夏）、「炎ゆ」、「灼く」、「裸」（以上、晩夏）と全て夏の季語であるが、第八句、第十句は「海女」以外に季語がない。強烈な他の句に影響されて夏の季語がないこともないが、それだけを取り出してみると季感が希薄である。

第一句集「雪白」のなから選んだ句と、その後の句を選び併せてこの句集を編んだ。（略）「雪白」「塩田」、白く清潔なものにぼくはあこがれているようだ。（略）

ぼくはこの句集に私小説風なテーマと社会的なテーマの二つが共存しからみ合っていることに気付いた。ぼくにとつてどちらも存在の理由のあるものであるが、将来この二つのテーマのかかり合い、結びつきをもっと密着させてゆきたいと思っている。

沢木欣一は『塩田』『あとがき』でこのように述べている。当時、輪島の海女は木綿の晒を黒い木綿糸で刺し上げた「サイジ」と呼ばれる禪を着装し上半身は裸、頭には日本手拭などでハチマキをして潜った（\*3）。

その「海女」もまた「白く清潔なもの」、「私小説風なテーマと社会的なテーマの二つが共存しからみ合っている」ものであり、そこに前節で述べた「海女」という言葉の力の源がある。

## 二・二 橋本多佳子第四句集『海彦』

この句集は昭和三十二年（一九五七）に刊行された。昭和三十年春の作品に「津田清子さんと同行志摩へ二日の旅をして」と前書きのある「和具大島」十一句がある。

和具大島 橋本多佳子

潮潜るまで海女が身の濡れいとふ

海女舟に在り泳げざる身をまかせ

鎌道れし若布が海女の身からむ

あはび採る底の海女にはいたはりなし

海女潜り雲丹を捧げ来若布を抱き来

南風吹けば海壊れると海女歎く

産みし乳産まざる乳海女かげろふ

海女あがり来るかげろふがとびつけり

かげろふを海女の太脚ふみしづめ

平砂に胸乳海女の濡身伏せ

春の日がじりじり鹹き身が乾く

「あはび」、「南風」（何れも三夏）以外は春の季語で、「かげろふ」（三春）が立ち「春の日がじりじり」とする陽春の日である。また、「海女」以外に季語がない第一句、第二句は季感が希薄であり、第十句は最初に歳時記例句で見た時は夏の句と思ったが、実際は春の句であった。

多佳子は昭和十六年（一九四一）刊の第一句集『海燕』でも、昭和十年作の「志摩」八句で「海女」を詠んでいる。まだこの時代は「海女」が季語として認知されていなかったよ

うで、全句に他に春の季語がある。また、「和具大島」の時とは対照的に「東風さむく」、「春潮のさむきに」、「海女も去りたり吾もいなむ」という春寒の一日であった。

志摩 橋本多佳子

春潮を着きけり志摩の国に来し

春潮のさむきに海女の業を見る

若布は長けて海女ゆく底ひ冥かりき

わがために春潮深く海女ゆけり

若布の底に海女ある光り目をこらす

海女の髪春潮に漬じ碧く垂る

東風さむく海女が去りゆく息の笛

東風さむく海女も去りたり吾もいなむ

昭和十年四月、多佳子は山口誓子の勧めにより「ホトトギス」を離脱し「馬酔木」に入会する。以後、誓子に師事し、本格的に俳句を勉強する。集中、「志摩」は「ホトトギス」離脱後最初の記念すべき作品であり、『海彦』の「和具大島」と共に女性が詠んだ「海女」の句として価値が高い。

二・三 橋本鶏二第三句集『山旅波旅』

この句集は昭和三十四年（一九五九）に刊行された。鶏二は鷹の秀句の多いことから「鷹の鶏二」と呼ばれている。『俳文学大辞典』が、私には「海女の鶏二」である。それ位、彼の十一の句集全てに「海女」の句は多い。

次は『山旅波旅』に詠まれた四年間の「海女」の句から二年分を抽出したものであるが、全てに何時何処で詠まれたか

が分かる前書きが添えてある。末尾に昭和二十五年（一九五〇）刊の第二句集『松囃子』、昭和四十一年（一九六六）刊の第四句集『朱』よりの句を付してあるのは、これらの句の出典を『山旅波旅』と誤記する歳時記が多いからである。

「第三句集『山旅波旅』より」

昭和二十六年

四月七日（略）志摩波切岬に着

鮑海女天に蹠をそろへたる

大濤に合掌うかび鮑海女

蛸が捲くかひなをあげて鮑海女

大濤に横たはり透け鮑海女

十二月・志摩安乗岬。

冬濤のまつただ中へ海女の径

海鼠海女襤褸の胴着に帯結はず

安乗海女大王海女と海鼠探る

海鼠探る海女を抱ける岬かな

昭和二十八年

五月八日（略）能登に遊ぶ。十一日・海女を見る。

蛭およぐ田が道ばたに海女の村

敷網のうへ漕ぐ舟に海女と乗り

陸の虻痒しと海女は顔を掻く

くちびるをうしほにしめし輪島海女

採りし和布を珠とさし上げ海女浮かぶ

海女透きて和布を採るが見ゆ箱眼鏡

澗揺れの和布にちかづける海女の手よ

海女笑むよ手上げて言葉かけやれば

輪島海女乳房に藻屑つけ哀れ

七月・志摩大王岬・御座岬に遊ぶ。

炎天や鎌を背にして海女あるく

流木にまたがる海女や雲の峯

裸の子叩いて愛撫天草海女

天草海女子にくちづけをして海へ

虫干しの手伝ひ海女や泉湧す

葉包紙波に投げすて天草海女

波に顔映りて舟の天草海女

舟すすみ海女のゆき交ふ島見ゆる

鮑海女磯火げむりに立ちて梳く

鮫干して海女の家寝たり盆の月

「夏」

「第二句集『松囃子』より」

「第四句集『朱』より」

「生涯 昭和二十九年」

石をもて囲ひし家に縫へる海女

このように、鶏二は幾度となく四季を問わず志摩を訪れ、輪島を訪ね、沢山の「海女」の句を作っている。次は『山旅波旅』所載の「海女」の句の季語と、その句が詠まれた季節を表にしたものである。

表4 「海女」の句の季語と詠まれた季節（『山旅波旅』）

季語	四月 (晩春)	五月 (初夏)	七月 (晩夏)	八月 (初秋)	十二月 (仲冬)	計
海女(晩春)	一	四	一			六
磯竈(初春)	二					二
和布(三春)	一	三				四
天草(三夏)			四			四
鮑(三夏)	四		一	二		七
海鼠(三冬)					三	三
その他	一	二	四	四	一	一二
計	九	九	一〇	六	四	三八

「天草」や「海鼠」は歳時記の季に同じであるが、「磯竈」は晩春、「和布」は晩春・初夏、「鮑」は晩春・晩夏・初秋に詠まれ、「海女」は「海女(磯敷き)」を季語に晩春・初夏・晩夏に、他の季語により四季全てに詠まれている。

海胆でも海鼠でも十月の波に生きているのだとふと不思議な思いがする。人の智慧で季節の割り振りを自然の生物に勝手にきめているのが、可笑しい無知な所業に思えるのだった。(橋本鶏二「石鏡にて」『随筆歳時記』)

次は『山旅波旅』の「跋」全文である。そこには写生への使徒として四季に出会うあるがままの自然をその物の季とし、山に礼し波に謝し、真に美しい作品が創り得られんことを心より願った鶏二の真摯な気持ちが見事に表現されている。

前方の崖はいつも峻嶮であつた。旅にすぎるおもいは些かの希望を自らの作につなぐためにのみ灯つていた。私はあくことなく旅に出た。そしていつも前方の崖をよじ、自分のみちに出ようとつとめた。自分を出ることは不可能だけれども、自分の振幅を大きくする事は不可能ではない。右へゆれても左へゆらいでも、その一瞬と一点のところで、自分を発見出来たらと絶えず私は考えた。何にせよ努力は大事であるが、それにもまして忍耐がもつと大事であると言うことも私は考えた。旅は私に、いつもそんな思いを与えて呉れた。物を見る目は風土を考えるようになり、何かに感じる心は生命を憶う心になつていた。然し私はそういう心を、自分への陥穽としたくはなかつた。物へ象へ抛りどころを絞つた。流れることを避け、凝集することを希求した。自分は孤独だが、作品は孤独ではない。物と象を諷う以上そのものを孤独で終らせることはまさしく罪悪である。詩の中にいるときの作者の本分として、山に礼し波に謝して、私は私の作品の少しでもよきものを授からんことをねがつた。それは物へ象へそして生命への礼であつた。写生への使徒としてそれは当然のことであり、冷酷でない限り精神の内面で必然におこる衝動であることを私は自覚した。旅中私は三つの景に逢着して、こみあげる嗚咽を隠しきれな

かつた。私の目は涙の透明な累々とした鏡面の中で、無類の感動にふるえていた。自分の力でどうなるものでもない。自分の限界を知る寂寥の味をそんなときこそいやというほど私はなめた。私の旅はいつも幸福であつた。私のためにのみある旅を私は満喫した。それだのに前方の崖はいつも峻嶮であつた。そんなとき人は何を考えたらしいのだろう。私はただ機縁と遇然を根深く待ちもうけた。捨身の心境と言うものを考えたりした。根底の覚悟以上のもの、自然の神秘に愛される自分になることを想つたりした。力以上のもの、統一の精神のみが持つ天籟の或るもの、それは意識をこえたところからくるもの、そういうものが実在としてたしかに存在するのだと言う予感を覚えたりした。それこそが芸術という名のものではないかと思つたりした。真に美なるもの、まことうつくしきものは果して作り出されるものなのであろうか？ 作ることと創り得られたということは違うのではあるまいか？

一個の石の前で黙考し、一つの山に向つて運命を憶うのも旅である。世にはまだまだ素朴の世界がのこり、清純な精神に溢れた土がある。私はそれらを在るものとしてじかのかたちでとらえたい。精神のなかの行旅とともに私の旅はいつまでもつづいてゆくであらう。

### 第三節 松井利彦

四月に虚子が没し、五月に『山旅波旅』が刊行された昭和三十四年（一九五九）七月、平凡社版『俳句歳時記』で「海女」は初めて季語として掲出される。その季節区分は夏（三夏）で、次は富安風生による解説と例句である。

海女の活動は、だいたい四月上旬、若布の解禁時から始まって、九月中旬に終るが、最盛期は夏であり、また、その感じからいっても、夏の季題として独立させて適当だと思われる。実際例句も多く生れつつあるようだ。

憩ひある海女をとらへて物語 平松 竈馬  
輪島海女乳房に藻屑つけ哀れ 橋本 鶏二

例句は二句とも季感は希薄であるが、第一句は第一節に掲げた昭和二十五年十一月号の「ホトトギス」雑詠で八月の投句、第二句は『山旅波旅』所載の初夏の作である。例句に沢木欣一『塩田』の句はないが、「海女」を夏季としたのには、沢木作品の印象も大きく影響したことであろう。

しかし、風生の思いにも拘わらず、続く昭和三十八年（一九六三）刊の石田波郷編『現代俳句歳時記』（番町書房）は「海女」を春季とした。例句は次の六句である。

旅にして海女の往来の浜にあり 清崎 敏郎  
姉海女の溝をくらひて稽古海女 井上 蘇郷  
磯桶に幼な顔あげ海女うかぶ 兼田 英太  
流木を火となし母の海女を待つ 西東 三鬼

平砂に胸乳海女の濡身伏せ 橋本多佳子  
稽古海女磯に戯れみて楽し 青木 蒲城

第四句は昭和三十二年六月号の「天狼」・「断崖」作品（第四句集『変身』所載）で春の作、第五句は夏とも見紛う季感があるが、前節で述べたように『海彦』所載の春の句である。また、その他の句は季感が希薄である。

そして、これ以降現在まで、ほとんどの歳時記が「海女」を春（晩春）とする。前考「ひやひやと昼寝」の一覽表に掲げた歳時記で「海女」を夏（三夏）とするものは東京美術版『風生編歳時記』、皆吉爽雨編『新撰俳句歳時記』（明治書院）、稲畑汀子編『ホトトギス新歳時記』のみである。

「海女」を春（晩春）とする歳時記解説の代表は昭和五十二年（一九七八）刊の鷹羽狩行編『新編俳句歳時記』（講談社）で、それは次のようなものである。

海女の活動は四月上旬から九月中旬にわたり、その最盛期が夏であるところから夏の季題とする歳時記もあるが、夏は海女でなくても海水浴で海にもぐるから、やはり晩春の磯開いそひらきに関連させ、その年はじめて見る海女の姿を中心として、春の季題としたい。

先の平凡社版『俳句歳時記』の解説と比較すると、海女の活動期についての認識は一致しており、要は最盛期の夏に着目するか、磯開の晩春に着目するかの違いに過ぎない。「夏は海女でなくても海水浴で海にもぐるから」との一節は正に牽強けんきょう付会、噴飯ふんぱんものの理由付けである。

また、「磯開」は「海女」よりずっと早く、既に昭和八年（一九三三）刊の改造社版『俳諧歳時記』や翌年の虚子編『新歳時記』にも春あるいは仲春の季語として掲出されている。「晩春の磯開に関連させ、その年はじめて見る海女の姿を中心として、春の季語としたい。」との見解は、夏を最盛期として一年中活動する「蝶」を「初蝶」を愛でる心持ちで春の季語とすることに酷似する。

第一節で述べたように、海女の営みは春、夏だけでない一年中のものであり、「海女」は四季に詠まれている。「海女」という全き人間の営みを花鳥諷詠の延長で捉え、たった一ヵ月（晩春）や三ヵ月（三春、三夏）の「本意・本情」に限定することは正に表現者としての自殺行為であり、そこに俳句を花鳥諷詠詩とすることの根本的な誤謬がある。

今日のな詩としての俳句という面からいえば、俳句が季題を必須とするということは、極めて困難な条件を荷ったものといわなければならない。それは、詩が自己表現であり、感情、意識の表現であり、より個性化が求められるということからいえば、季題を必須とするということが、既に観念性の継承であり、規範美をもつていて、個性化をさまたげるからである。子規が、「其花実の最多き時を以て季と為すべし」と規定したことは、季題が個性性であるというゆき方と逆行するものであることを述べているのであり、四季の題目によって「其時候の連想を起す可し」と語ったことは、連想を気候によって大枠

をきめ、その大枠にそって個人体験が鑑賞の際に加えられるということ、全体からいって個性化の要素は限定されてしまうからである。

しかも、子規的に俳句の対象を四季の風物に限るということになれば、人間は、四季の風物の中の人間として存在することになり、生身ではなくなる。俳句の対象として人間を意識した瞬間に、人間は天然化し、その生身身を失うとしたら、人間とは何かを常に追求し続けて来た近代・現代の文学の流れからいえば、既に異質であったといわなければならない。（松井利彦「俳句は『救い』か（四）・子規と季題・「青樹」昭和五十四年三月号）

#### 第四節 稲畑汀子

歳時記で「海女」を春季、あるいは夏季に限定することに果たしてどれだけの意味があるのか、例句で見てみよう。

磯嘆きあのもこのもとなりにけり 橋本 鶏二

輪島海女乳房に藻屑つけ哀れ 橋本 鶏二

旅にして海女の往來の浜にあり 清崎 敏郎

潮潜るまで海女が身の濡れいとふ 橋本多佳子

前節までに紹介したこれらの句は第一句（夏の句）、第二句（初夏の句）、第三句は歳時記により春（晩春）、夏（三夏）、何れの例句にも採用されている。また、第四句（春の句）は夏（三夏）の例句として掲げる歳時記がある。

これは原典の確認を怠ったり、他の歳時記から安易に拝借したりは無責任で恥ずべき編集態度によるものである。しかし、それはこれまでに繰り返し指摘するように、これらの句に春か夏かという季感が基本的に希薄であるということにも起因するであろう。

次は「海女」を夏(三夏)とする昭和六十一年(一九八六)刊の稲畑汀子編『ホトトギス新歳時記』と平成八年(一九九六)刊の改訂版を合わせた全例句に、「海女」を春(晩春)とする歳時記からの類例の句を並記したものである。

- |                    |       |
|--------------------|-------|
| ① 蹴上げたる足のそろひて海女しづむ | 山田 千城 |
| 日を一蹴りくるぶし絞り海女潜る    | 合田 学  |
| ② 海女沈む鮫除帯の朱を曳いて    | 久野 一花 |
| 海女沈む自刃のごとき深さまで     | 大口 元通 |
| ③ 崖の上の家よりも海女桶抱いて   | 服部 圭佑 |
| 陸ながくあゆみ来りて海女潜る     | 山口波津女 |
| ④ 海女として鉄道員の妻として    | 上野 泰  |
| はや母の顔にもどりて陸の海女     | 青柳 照葉 |
| ⑤ 黒髪は海女にもいのち真水浴ぶ   | 石井とし夫 |
| 門に出て来て梳るそれも海女      | 森田 峠  |
| ⑥ 泳ぎ戻り稽古海女等も昼餉時    | 湯浅 桃邑 |
| 髪乾くまもなき海女の昼餉かな     | 檜 紀代  |
| ⑦ 時化あとの海が暗しと海女嘆き   | 中村 聖鳥 |
| 浮くたびに磯笛はげし海中暗し     | 西東 三鬼 |
| ⑧ 海女小屋をしかと閉ざして潮休み  | 橋川 忠夫 |

沖休み立て膝海女の歌留多かな  
 ⑨ 時化てみる海遠見して海女溜  
 荒波を見つめ海女等の懐手

⑩ 磯桶の辺に浮き海女の頭の小さし  
 磯桶に幼な顔あげ海女うかぶ

⑪ 磯笛のするどき海女は若かりし  
 手の中に濡れ髪きしみ海女若し

⑫ 桶抱いて浮いてばかりの稽古海女  
 潜きしがすぐ浮き上る稽古海女

⑬ 命綱伸びゆく不安海女くぐる  
 息つづくかぎりのびたる海女の綱

以上十三組、二十六句の中で夏の季感らしいものがあるのは冬の季語「鮫」(現実には夏)がある②の第一句のみである。

新年の季語「歌留多」がある⑧の第一句を含め、「海女」以外に季語のない他の句は何れが春の句か夏の句か、判別出来る要素はなく、更に言えば季感自体が希薄である。海女の営みは一年中のものであり、春、夏に限らず、どの季節に詠まれても不思議ではない作品がほとんどである。

歳時記で「海女」を春季、あるいは夏季に限定し、解説で理由付けをして、それが「海女」の本意・本情であると力説してみた所で、「海女」以外に季語を持たない「海女」例句はそれとは係わりのない存在となっているのである。

『ホトトギス新歳時記』初版「序」によれば、①から⑩までの十句は『ホトトギス雑詠選集』及び原則として一千号ま

での雑詠欄から選んだものである。雑詠が年尾選から汀子選になったのは昭和五十二年八月号からで、一千号は昭和五十五年八月号であるから、十句のほとんどは「海女」を春（晩春）とする年尾選によるものである。実際、③から⑥までの四句は第一節に述べた「海女」を四月（晩春）の季語とする『年尾選ホトトギス雑詠選集』からのものである。

また、改訂版による差し替えて新しく例句となった①から③までの三句は、昭和六十二年八月号から連載が始まった「海女」を夏（三夏）とする汀子選「ホトトギス雑詠選集」予選稿から主に選んだものである。

「ホトトギス」で最初に「海女」を季語とした作品を虚子が春（晩春）に詠み、それを引き継いだ高浜年尾が『年尾選ホトトギス雑詠選集』で「海女」を春（晩春）としたものを、稲畑汀子が夏（三夏）とする。季語の季に対する考え方は親子、孫と雖も人それぞれで、思う所があつてのことであろうから、それは我々が云々することではない。

しかし、それにより結社内の先人の句を勝手に春季から夏季に変更し、一方で本考冒頭の虚子の句「海女沈む海に遊覧船浮む」は春の句として敢えて例句とせず、「海女とても陸こそよけれ桃の花」は「桃の花」例句としてきちんと載録するなど、身内を第一とし会員を専制支配する世襲制結社の典型であり、声高に伝統を謳う資格などない所業である。

## 第五節 三橋敏雄

高橋順子『連句のたのしみ』によれば、連句（近世俳諧）は芭蕉の時代に主流になった一巻三十六句を以て成る歌仙を例に採れば、凡そ次のような構成である。

①発句は正客の役で当季の季語を入れ挨拶の心を込める。  
②脇句は亭主の役で発句と同季、これから主客挨拶となる。

③第三は相伴客が務め、事実上ここから歌仙が始まる。

④四番目以降、最後の挙句までの句を平句と称する。

⑤挙句は最後の句で、一巻を目出度く巻き上げる。

連句にはその規定、禁制、故実などを定めた式目があり、同書巻末にはそれに基づいた標準型の「歌仙定座配置表」が掲げられている。それによれば、発句、脇句、挙句は有季、第三は有季あるいは雑である。また、平句は有季、恋、雑が序列複雑に構成され、平句三十二句中の十四句から十九句、平均で十七、八句が恋、雑で無季であり、これは歌仙一巻三十六句の約半分に当たる数である。

子規の俳句革新により、連句の発句が独立化したとされる俳句が誕生し、他方で連句がほとんど行われなくなった現在、俳句というインパクトのある最短詩型を手にした全き表現者が俳句に平句の要素を加えて行くことは、ごく当然の自然の成り行きである。

しかし、それは何も子規の俳句革新に始まったことではない。先の「西瓜考」で述べたように、既にそれより二百年前の元禄時代を転機として、俳諧の普及が大衆化を生じ、大衆

化が発句の独立化を促し、俳諧は連句全盛時代から発句尊重時代へ転向して行った。大衆にとつての連句の難度、発句の手軽さを考慮すれば、俳諧の普及と大衆化、発句の独立化がセットで同時に起こるのはごく当然のことであつた。

そして、そうした趨勢に即して、近世前期の主流をなした『増山井』系に代わり、季語数の飛躍的に増大した新しい系統の歳時記が大衆に支持され主流となつて行った。前考「ひやひやと昼寝」で述べた「昼寝」もそうした時期に新たに季語となつたものの一つである。

この季語数の飛躍的な増大が実質的には発句の平句への領域拡大であり、芭蕉から見れば『増山井』の三、四倍に季語数が増大した現在の歳時記によつて詠まれる作品の多数は無季俳句であり、その作者である現代の俳人は全て一人の例外もなく無季俳人であることも先の「西瓜考」で述べた。

実際、現代の俳人が『増山井』を与えられて、これで有季俳句だけを作りなさいと言われれば、皆絶句するであろう。それ位季語の数は少ない。意識するとしないとに拘わらず、既に現在の俳句は実質的に発句の独立化と平句の独立化を合わせたものとなつていたのである。

前考「ひやひやと昼寝」で述べた近世からの季語「冷やか」が初秋から仲秋、晩秋、更には冬、夏、無季にまでその用例を拡げていることや、本考で述べた「海女」のような限りなく無季に近い言葉が新しい季語として歳時記に順次追加されて行くことは、その顕著な表れである。

海女を取り巻く多彩な季語を全て取り去り「海女」だけを季語とした句には全体的に季感が希薄であり、どの季節に詠まれても不思議ではないことをこれまで述べて来た。それは海女の営みが一年中のものである。

現実に、前考「ひやひやと昼寝」文末一覽表の歳時記で、秋桜子、山本健吉、楠本憲吉、金子兜太の編、中村汀女監修のものには「海女」は季語として掲出されていない。

それでは何故「海女」は季語となり、「海女」を季語として詠んだ句が佳句であり得るのか。それは「海女」という言葉に力があるからである。

女性が裸身に近い姿態で海という大自然に立ち向かい、男勝りの危険で体力のいる潜水作業を行い、豊かな四季の海の幸を収穫し浮上する。正に「女」と「海」の鮮烈な「二物衝撃」である。そうした男勝りの仕事と一般女性と変わることのない女性らしさとの対照の妙、それが「海女」という言葉、季語の力の源であり、季節感などというものを超越したもつと本源的な所にその本意・本情、本質はある。

第一節の表1で「海女」は七年間に三五一句が詠まれているが、その同じ七年間に「海人、蟹」（男女）、「海士」（男）を詠んだ句は僅か十八句であること、同じように四季のものを収穫する「漁夫（漁師）」、「農夫（農婦）」が未だに季語となっていないことから、それは窺い知ることが出来る。

広く言葉は季語も含め、人々の生活との係わりが第一義であり、そこに言葉の力の源がある。言葉と季節との

係わりはそのことを通しての二義的なものであり、また、それは特定の季節には限らない。

私は前考「ひやひやと昼寝」の「結語」でこのように書いたが、「海女」はそうした言葉、季語の典型であろう。

しかし、これまで述べた俳句に加えられた平均的要素は全ての言葉に本来内包されているものを顕在化させただけのことである。先の「新歳時記考序説」から抜粋し再録する次の渡辺白泉と大須賀乙字の論がそのことを明確に示している。

季語は（略）季感を表現するという特殊的作用を有するのみならず、更に季感に非ざる諸他の感覚又は感情を表現するという一般的作用を有している。そこで、季語制度の下に於ては（略）詩的感動の要素を季感が構成せずに季物の一般的性質に対する感覚又は感情が構成するところの（略）俳句も亦当然に発生する。（略）

かくのごとく、季語制度は、それが所詮、季感を俳句の感動の不可欠の要素となすところの觀念にもとづく筈のものであるにもかかわらず、他方実際の作品において、季感をもたないものをも生みいだすという矛盾を有することによつて、必然に崩壊すべき運命をもつものである。

（渡辺白泉「季語の作用と無季俳句 上、下」『句と評論』昭和十年九、十月号）

季といえは、四季の別すなわち春夏秋冬の別をさして、いずれかの季に収めなければならぬように考えていたのである。僕はその四季の別を全く撤し去つて、一々の景

物氣象に感情が象徴されるものとして、一つの季語があるいは春夏にわたるものがあり、あるいは夏秋にわたるものがあり、あるいは三季にわたるものがあるて、単に季語としては何の意義をも与えないことになければならぬと主張するのである。（略）一俳句の統一的情趣のうちには作者の情意的活動が融け込んで自我を没した場合に、季感というものが成り立つのであつて、季語とは、かような場合の中心的景物を指しているのであるから、俳句を離れては季語はないのである。（「季感象徴論」「常磐木」大正八年一月号）

連句の場合はその式目に基づいた「定座配置」に合致した季の言葉を選び用いる必要がある。そのためには「俳諧歳時記」は季節感の軸を第一義とし、季語の季を一季節に決定して置く必然があつた。

しかし、発句が連句から独立して誕生した俳句は、独立による発句としての役目の喪失（あるいは、それからの開放）と、それに伴う形式・内容両面にわたる実質的な平均要素の取り込みにより大きな変貌を遂げ、もう既に俳句イコール発句ではない。即ち、歳時記における季語の季を始めから一季節に限定する必然はない。

これからの歳時記には乙字の指摘するような現実に合わせられた幅広い季の設定と、他方では詩語としての無季語の載録、また、それが可能な新たな構成が必須となる。

それが先の「新歳時記考序説」で述べた物象感の軸を第一

義とする新しい俳句歳時記の形である。現行の歳時記はまだ従来の「俳諧歳時記」の域を出ていない。真の「現代俳句歳時記」が今、本当に求められているのである。

最後に、本考冒頭の句と、それに似て非なる句をここに並記してみよう。

海女沈む海に遊覧船浮む 高浜 虚子

海女沈み遠く浮上のサブマリン 三橋 敏雄

三橋敏雄の句は第一句集『まぼろしの鱧』所載、昭和三十一年代の作品である。海女の営みに対比された遊覧船の観光客と潜水艦の兵隊、両句は非なるようであり、また似ている。虚子と新興俳句、同じ「あま」でも陸の尼が住まう祇王寺に

始まる次の「押せば開く」はそれがテーマとなる。

なお、そのことが切っ掛けで、復本一郎「虚子の無季句」（『鬼』第十四号）及び一連の関連論考に接する機会を得た。

その結果、これまでの拙考においては、無季（雑）の俳句についての子規の肯定度を期待感を持って過大に評価していたこと、歳時記論に集中する余り切字についての認識が希薄に過ぎたことなどを痛感した。

今後は、その二点を常に念頭に置きながら論を進めて行くこととする。季語を論じ歳時記を論じるにも、子規の俳句革新や俳句の切字についての正確な認識が不可欠となる局面がこれからも何度か訪れると予感するからである。

## 参考文献

- \* 1 『虚子選ホトトギス雑詠選集』（春・夏の部、秋・冬の部）、高浜年尾編、昭和三十七年（一九六二）、新樹社
- \* 2 『年尾選ホトトギス雑詠選集』（春・夏の部、秋・冬の部）、高浜年尾編、昭和五十三年（一九七八）、新樹社
- \* 3 『海女』田辺悟著、ものと人間の文化史73、平成五年（一九九三）、法政大学出版局
- \* 4 『現代句集』現代日本文学大系95、昭和五十六年（一九八一）、筑摩書房
- \* 5 『橋本多佳子全集』橋本多佳子著、平成元年（一九八九）、立風書房
- \* 6 『橋本鶏二全句集』橋本鶏二著、平成二年（一九九〇）、角川書店
- \* 7 『随筆歳時記』橋本鶏二著、昭和五十八年（一九八三）、牧羊社
- \* 8 『西東三鬼全句集』西東三鬼著、平畑静塔・三谷昭監修、昭和四十六年（一九七一）、都市出版社
- \* 9 『連句のたのしみ』高橋順子著、平成九年（一九九七）、新潮選書
- \* 10 『三橋敏雄全句集（増訂版）』三橋敏雄著、平成二年（一九九〇）、立風書房

# 押せば開く

前田霧人

## 第一節 緒言

かつて私が篠原鳳作の評伝『鳳作の季節』で新興俳句の時代を描いた時、高浜虚子は脇役であった。しかし、その時代、虚子のかの有名な無季の句を自句集に発表し、また、新たに得た資料によれば、新興俳句について実に様々の興味深い発言を残している。

特に面白いのは、虚子の古稀記念として昭和十八年（一九四三）に中央出版協会より上梓された『俳談』である。平成九年（一九九七）には「ホトトギス」創刊百年記念の一環として、その岩波文庫版が刊行されている。

同書は虚子の「俳談、雑談の集録」（高浜虚子「序」）である。年代は大正十四年（一九二五）三月から昭和十五年（一九四〇）一月、虚子の年齢で言えば五十一歳から六十五歳、時代としては丁度、新興俳句の黎明前夜から京大俳句事件による弾圧直前までの期間に相当する。

本考はこの『俳談』を中心に「虚子の新興俳句」を追ったものである。深見けん二「解説」によれば同書の編集者是不

明であるが、出典のほとんどは「ホトトギス」誌上に発表された各種の座談会記事であり、引用に当たっては常に原文との照合を行った。

また、『俳談』各項目末尾の年月は座談会開催時を記したもので、「ホトトギス」掲載年月とはズレがある。そのため、参照の便に配慮して引用末尾に（\*番号）を付し、文末の「参考文献」に纏めて出典を明記した。

『俳談』中の発言が面白いのは、公に向けた文章とは異なり、気を許した心地良い取り巻きの中高揚した気分での発言が、虚子の本音を吐露した案外に過激なものであることが多いからである。一例を挙げれば次の通りで、前者は精々慇懃無礼程度いんぎんの抑えたものであるが、後者では一転して吐き捨てるような過激な物言いとなっているのである。

新興俳句とかいうものを唱えて居る人がある。其等の人の作る句には俳句らしいものも有る、俳句らしからざるものも有る。ホトトギスに投句し来らば「新興」という文字を返却して、只俳句として可なるものは採る。

（「東風漫語」「ホトトギス」昭和十年五月号）

新興俳句という言葉を口にするさえ厭やなんだ、新興という言葉は至る所にある。（略）新興何々、新興何々、枚挙に遑いとまなしだ。新興といえど人が飛びつくように思つて商品価値をねらつておる。そんな月並な言葉を用いて得意でおるのは見つともない。よしならよかろう。（「新興俳句という言葉」『俳談』昭和十一年一月・\*11）

## 第二節 大正十一年（一九二二）

この年は日野草城が「京鹿子」五月号の編集後記で次のように述べ、来るべき時代を予感させる「新興俳句」という言葉が初めて世に発せられた年である。

東京の帝大俳句会が秋桜子氏、風生氏、みづほ氏等の手で復活されることとなりました。東西相呼応してインテリゲンチヤの新興俳句を提唱したいものです。

虚子は四月、この東大俳句会復興の発会式に水原秋桜子、山口誓子と同席し、三月には京都の帝大三高俳句会で草城、誓子らを指導している（高浜虚子「肥前の国まで」「ホトトギス」大正十一年五月号）。こうして見ると、新興俳句の生みの親は案外、虚子であったのかも知れない。

十二月、虚子自身も自らの「新興俳句」に向けて重要な旅をする。彼は三河、名古屋、大阪を経て六日夕、京都に着く。そして翌朝、「京鹿子」、「鹿笛」の合同句会出席のため天龍寺に赴き、嵯峨野を散策し祇王寺を訪う。

木像に若き面ざし冬日影  
袖子一つ供へて寒し像の前

高浜 虚子

祇王寺の冬日の障子顧みる

これが高浜虚子「大阪、京都、豊橋」（「ホトトギス」大正十二年二月号）に記された祇王寺での作であるが、同文の「此侘しい庵を物憐れに覚えて振り返った時には、既に尼の

手で無造作に其縁側の障子は閉められた。」との一節には彼の未練が彷彿とする。この時、確かに虚子は祇王寺の何かに取り憑かれたのである。彼はその時のことを改めて「嵯峨半日」（「ホトトギス」大正十二年三月号）に書く。

祇王寺はいつ来て見てももの淋しい尼寺である。そこには四五枚の白い障子がしまつていて音もしない。満山の雑木は皆落葉している。五六本の楓も半ば落葉している。落葉に埋れる小さい尼寺という心持である。

一行はそのまま行き過ぎようとするが、虚子は木像が見たかった。以前に子規と、また兄の池内如翠とも見たことがあり。「小さい黒い木像」であったことだけは覚えていたが、記憶がはつきりしない。もう一度見たい。田中王城が心得て案内を乞い、虚子と王城とだけが上がる。

「これが祇王様の御像どす。」という。よくよく見て居るうちに、その顔がはつきりして来る。真黒な像であるが而かも美しい、品のいい、若々しい顔であることがわかる。（略）此物さびた小さい庵の中にかかる若々しい像のあることが、いかにも待設けなかつたことのような心持がする。それから前には袖子が唯一つ供えてある。この像にふさわしい感じがしてなつかしく覚える。尼の手に持っている蠟燭の灯が別の木像に転ずる。それは祇女、仏、祇王の母、清盛、の像である。尼は祇王の前の仏灯だけとしたばかりで、祇女以下の像は自分の持つていた蠟燭で、その顔を照し出したに過ぎない。殊に清盛の

像はちよつと蠟燭の光が射したというばかりである。

この後、一カ月前の文と同じ去り際の一節が繰り返されて、祇王寺についての虚子の描写は終わる。先の祇王寺での三句がこの文のままであり、虚子や庵主にとって平家物語ゆかりの五人の中の主役はやはり祇王であることがこれで良く分かる。同文にある「見ると二十歳ばかりの尼である。顔は美しくない。」との一節にも当時四十八歳、まだ男盛りの虚子の祇王寺に寄せるロマンが彷彿としている。

### 第三節 大正十三年（一九二四）

この年四月、虚子は小樽高商を卒業した長男、年尾を連れて上方に遊び、再び祇王寺を訪れる。次は高浜年尾「嵯峨漫歩」（ホトトギス）大正十三年七月号）の一節である。

殊に嵯峨が好きである父は、二尊院から祇王寺への狭い抜徑を知っていた。（略）

新田義貞の首塚の碑の前を通り抜けると祇王寺だった。それは只住居であるという程のものであるだけで、別に寺であるようには見えなかった。兩戸は閉されたままに、人は住んでいる様子がなかった。（略）  
芝居の大道具のそのような枝折戸しおれどは押す手に軽く開いた。（略）

父と私とはささやかな家を一トめぐりした。（略）  
父は句帖を出してしきりに句をかきつけた。（略）

祇王寺からのなだらかな勾配を下り乍ら父は私に話しかけた。「祇王寺の留守の扉しほぞや押せばあく、という句が出来たよ。」「いいですね。」私はそう父に返事して、自分が押してあげた祇王寺の枝折戸の姿をまざまざと思い浮べた。いい気持の句だと思った。後の話ではあるが、この句を父が大阪でできる人に請わると色紙に書いた。そして書いて見ても初めて句に季のない事を知った。留守の扉を花の扉に訂正した。けれども私にはどうも物足りなくなつたように思われた。父にも私にも、その時迄その句が無季であることに気がつかなかつた事を考えると、実際に滑稽に思われた。併よし一方に於て、それ程迄に私達はその句に、満足して浸っていたのであつたらしい。

虚子と年尾が祇王寺を訪れたのは四月の花見時であるが、後に川口松太郎により「祇王寺桜」と名付けられる桜の老木は「背丈が高いため、花を見るには、少し遠目でないと、すぐ目の前で眺めることができない。祇王寺桜は、落花を見るのが美しい」（高岡智照尼『祇王寺日記』）のである。

また、当時の祇王寺は昭和十年に庵主となる智照尼が「最初の住職を務められた六条尼公他界後は、入れ替り立ち替り、ものの三年と住みつく尼はなく、無住の時もあり、私が入庵する時も無住で戸締めになつていて、その荒唐振りには不気味で何か妖気を感じる程の有様であつた。」（『祇王寺日記』）と書くような状態であつた。

「留守の扉」を「花の扉」に訂正したのが、年尾には「どうも物足りなくなつたように思われた」のは当然である。

この句については「季語『神の留守』が隠れていそうであり、純粹な無季句として評価していいものかどうか。」（澤好摩「俳句界時評」「俳句界」二〇〇七年一月号）との論もあるが、「神の留守」は陰曆十月の神社であり、陽曆四月の尼寺には当たらない。純粹な無季句であり、この時虚子は祇王寺の扉と共に、無季の扉をも確かに開けてしまったのである。

#### 第四節 昭和五年（一九三〇）

この年三月、虚子は改造社より第五句集『句集虚子』（改造文庫）を刊行する。これは季節別、部別、季題別という従来の所謂歳時記方式で作品を配列したものであるが、虚子はその春、夏、秋、冬、新年に続く巻末に「無季」の欄を特別に設け、前節に述べた祇王寺の句を只一句掲載したのである。

祇王寺の留守の扉や推せば開く 高浜 虚子

虚子自身も含め世間では「押せば」で通っているが、初出はこのように「推せば」であった。

その祇王寺という尼寺が昼日中留守であったという懐かしい感じがこの句になった。季がなかった。いつもならば「花の扉」とでもするのである。が是非「留守」としなければ私のその時の感じは出なかった。

連句でいえばひら（平）句の如きものである。「句集虚

子」の巻末に収録したのはこの句を棄て去るに忍びなかったからである。私は無季の句を必ずしも排斥するものではない。ただしいい句は出来にくい。また無季の句は俳句ではない。無季の句はただの十七字詩である。

彼は後の昭和三十一年（一九五六）、「虚子俳話―無季の句」（朝日新聞「二月二十六日付」）でこのように述べている。「花の扉」では感じが出ない理由は前節に述べたが、虚子が指摘するまでもなく、この句の眼目は「留守」という言葉にある。

祇王寺は以前より彼が何度も訪れ、去る時には「物憐れに覚えて」振り返ってしまう程に魅せられた場所である。その尼寺が留守であった。普通、留守の扉は閉まっているものであるが、試しに押してみたら意外にも開いた。

サスペンスの場合、開いた扉の中に転がっているのは大抵が死体であるが、祇王寺には平家物語ゆかりの祇王、仏御前から始まる沢山の尼の秘められた人生の歴史が息づいている。その秘密の在り所に少しばかり近付いた気持ち、それが虚子の詩心を揺さぶり、無季でありながら棄て去るに忍びない程の佳句が出来たのである。

西村和子『虚子の京都』は上記の文について「この一文は虚子の俳句観と俳句に対する節度を物語っているといえよう。」と書いている。「節度」とは「度を越さない、適当なほどあい」（『広辞苑第四版』）であり、「守旧派」虚子を言い得て妙である。

しかし、虚子の言は矛盾に満ちている。「私は無季の句を必ずしも排斥するものではない。」と言いながら「無季の句は俳句ではない。」と俳句から排斥する。また、「いい句は出来にくい。」と試みることもしないで決め付ける。

彼は別の所では「私の主義としてドンドン作って見る、それがはじめて、主義はあとから出来るものだと思います。」（『俳諧詩』『俳談』昭和十四年三月・\*12）と言っているが無季の句についてはそうしなかつた。

一方、虚子が『句集虚子』を刊行した翌月の四月、秋桜子は第一句集『葛飾』を馬酔木発行所より上梓する。翌月についても、発行日と言えば『句集虚子』が三月二十八日、『葛飾』が四月一日であるから僅か四日の差である。

先の「西瓜考」で両者の歳時記刊行時期の符合具合を述べたが、句集でもこうである。虚子は二年前の昭和三年六月に第四句集『虚子句集』を春秋社より刊行したばかりである。虚子の秋桜子への對抗意識は相当のものであつた。

宗田安正『昭和の名句集を読む』によれば、「昭和（近代）俳句の出發」を句集『葛飾』と翌年の評論「（自然の真）」と「（文芸上の真）」、秋桜子の「ホトトギス」離脱に求めるのが今では定説になつてゐる。

同句集は師の虚子に序文を請わず巻頭の自序で自己の俳句観を披瀝している。構成も『句集虚子』のような従来の季節別の歳時記方式に対して、四季ごとのテーマ別、配列も制作年代順ではなく、徹底して内容中心主義を採っており、近代

的な編集意識を導入した最初の句集でもあるという。

しかし、私が『葛飾』で一番興味深く思つたのは春、夏、秋、冬に続く巻末に別途「連作」の欄を設け、「筑波山縁起」を始めとする代表作品を掲載していることである。

『句集虚子』巻末に設けた「無季」欄はこの『葛飾』巻末の「連作」欄に對抗するものではなかつたのか。

二年前の『虚子句集』（収録対象は明治二十五年から昭和三年までの句で、昭和四年までの『句集虚子』とほぼ同じ）で出来たにも拘わらず、『葛飾』と同時刊行の『句集虚子』で「無季」欄の設置を敢行したことは、そう考えれば一番納得が行くのである。

虚子は句集『葛飾』に対して「たったあれだけのものかと思ひました。」と秋桜子に言う（水原秋桜子『高浜虚子』）。また、それより先、『俳談』には虚子の次の言葉が見える。

万葉調、万葉調ということが二、三年来私の耳に聞こえるが、（略）万葉調がどうだと言つて喧しく議論するのは閑人の閑事業だ。それは放つて置いたらよかるう。

（「万葉調」『俳談』昭和三年十二月・\*1）

諸君が（略）俺の俳句はかかる点を以て優に俳句界に地歩を占めることが出来るのであると漸く自任するような態度を取ることがある。（略）殊に最早自分は独立が出来るものと考えて、旗幟をひるがえして一家を成すという様子を見せる時にその感じがする。私に糸を操つてここまで来たのであるが、もうこの糸はこれ限りできれ

てしまうのであるかと幾分淋しくもなる。尤もその人自身は独力で、それから自由に先に進むことが出来るという自信があるのではあるが、しかし大概はそれ限りになつてしまう人が多い。(「操つていた糸が切れる」『俳談』昭和三年十二月・\*1)

一方の旗頭になるとどうも腕前が落ちてゆくらしい。

(略) 城を守ることに急であつて、(略) 自分の好むところに奔つて、自恣に陥つて、その作句は不知識の間に墮落しているというようなこともあるようである。

一 国一城の主になるとかく旧主に弓を引きたがるものが多い。弓を引くことは余り愉快なことでもあるまいが、そうしないと己の立場が作れないからであろう。

(「一方の旗頭」『俳談』昭和五年二月・\*2)

最初の二つは秋桜子も参加した「漫談会」での発言、三つ目は出典不詳であるが、このような空気の中で秋桜子が虚子に『葛飾』の序文を請わなかったのは当然である。

復本一郎「虚子の無季句」(「鬼」第十四号、以下「復本論文」と略記)によれば、先の「虚子俳話―無季の句」(「朝日新聞」昭和三十一年二月二十六日付)はその一年前の昭和三十年(一九五五)、「俳句」一月号に掲載の日野草城「仰臥閑談」に対するものであろうとのことである。

なお、「復本論文」は虚子の「祇王寺」の句に係わる部分のみの引用であるが、草城の原文は当時の彼の無季俳句観を存分に述べたもので、それ自体非常に興味深い。

また、「復本論文」によれば「祇王寺」の句に対する草城の言及はそれより二十年前の新興俳句時代、「旗艦」昭和十年一月号の「感想」にもある。「復本論文」に引用のない一節を紹介すると、

とまれ、「句集虚子」に於ける無季の句一章の存在よりは、「黄旗」に於ける自由律の句一章の存在の方が、吾々にとつて興味が深い。

といった具合である。因みに「黄旗」に於ける自由律の句一章とは次の作品である。

ただ見る起き伏し枯野の起き伏し 山口 誓子

そして、「復本論文」には記載がないが、この時にも虚子は草城の「感想」に敏感に反応したかの如く、「ホトトギス」昭和十一年三月号の「座談会」にそれらしき一節が見える。その詳細については次節で述べることとして、彼は同じ座談会の中で次のように発言している。

いわゆる新興俳句とか言っているものも、もともと『ホトトギス』に養われたものだ。旨く養つて行こうと思つているうちに、自分で飛び出して、極端にやつてそれでもいいと思つている。

罫を越えたものは俳句ではなくなる。(『ホトトギス』に養われたものだ)『俳談』昭和十一年一月・\*11)

第二節で大正十一年(一九二二)当時の虚子と草城、秋桜子、誓子らの蜜月振りについて、「こうして見ると、新興俳句の生みの親は案外、虚子であったのかも知れない。」と書いた

が、虚子自身そういう自負を持っていたのである。そして、こうした虚子の思いが秋桜子や草城への過剰とも言える反応の根底にあるのではないかと推察される。

しかし、同じように虚子に反旗を翻した三人の内、もう一人の誓子については、昭和十年（一九三五）に誓子が「ホトトギス」を離脱した後も、先の「海女沈む」で紹介したように昭和二十三年（一九四八）、虚子は療養先の三重県四日市市天ヶ須賀海岸に誓子を見舞ったりしているのである。

こうしてこの昭和五年、長年の師弟関係を続けて来た師の虚子は『句集虚子』を、弟子の秋桜子は『葛飾』を上梓し、それぞれに画期的な「無季」欄、「連作」欄を巻末に設けた。そして、その「無季」、「連作」は翌昭和六年十月、秋桜子の「ホトトギス」離脱によって華々しく開幕する「新興俳句」の時代において、同じように重要なキーワードとなった。

しかし、それは秋桜子にとっては新興俳句の主役の一人としての新しい出発であったが、一方の虚子は自らの現状を堅持する立場から出ることはなかった。

この昭和五年、秋桜子は三十八歳、主宰する「馬酔木」は高屋窓秋、石橋竹秋子（後の辰之助）、加藤楸邨始め、新しい出発に胸をときめかせる有力な若者の集団であった。

一方、虚子は五十六歳、「花鳥諷詠」、「客観写生」の唱導により対象と表現の両面で俳句を規定し固定化させた「ホトトギス」王国を既に築き上げていた。彼はその総帥としての地位をもう放棄することは出来なかったのである。

## 第五節 昭和十一年（一九三六）

前節から五年経った昭和十年（一九三五）は既に新興俳句全盛の時代で、一月には草城が大阪で「旗艦」を創刊し、四月には九州で吉岡禅寺洞主宰「天の川」が篠原鳳作の無季連作を先頭に「無季俳句建設」を宣言する。

また、五月には誓子が「ホトトギス」を脱退して「馬酔木」に加入し、新興俳句における有季、無季両派の分裂傾向が次第に鮮明になっていた。

翌昭和十一年（一九三六）を中心に『俳談』における虚子の発言をこれから紹介して行く。まず前節に述べた「旗艦」昭和十年十一月号の日野草城「感想」に対する虚子の反応と思われる一節は次の通りである。

無季の句は昔から取り除けとして誰にも多少はあるのである。発句は鉄則として季がなければならぬことになつてはいるが、唯取り除けとして極少数無季の句がありはする。私も現に唯一句無季の句を句集にとどめておる。これは俳句に無季の句を是認したわけではない。唯故人並に一句保存して置いたのである。そうしてそれは無季の句もまた、俳句としてではないが、独立した或物となるべきだということを暗示しているつもりである。（俳句という語『俳談』昭和十一年一月・\*11）

しかし、「句集」とは「俳句」を「集録」するものであり、

虚子は「祇王寺」の句を他の有季句と同列に「春」、「夏」、「秋」、「冬」、「新年」に続く巻末の「無季」欄に何の注釈もなく掲載している。それは取りも直さず彼がこの句を俳句として「是認した」ことではないのか。

そして、虚子発言の真骨頂は同じ座談会のもう少し前段の部分にある。この昭和十一年当時の新興俳句の高揚感が虚子にも伝染し、また、草城の言に神経を逆撫でされ逆上したかの如く、彼は次のように「かねがね思っていたことをつい言つて」しまうのである。

連歌時代から一番始めの句即ち発句には必ず季があるということは立派な規則となつている。(それが俳諧になり、又独立して発句となつても同様である。)今日俳句という言葉が出来たのは、発句というものを俳句と称えることに子規がしたのである。

ただこういうことは言える。遡さかのぼつて発句はどこまでも発句であつてそれを俳句というのはいけないという議論が成立なりたつといへば成立し得る。(略)そこで俳句という語は発句という語と同一とするよりも、俳諧の句という意義とし、俳諧の雑の句即ち無季の句もまた俳句であるという説も成立し得る。私は何故世人がここまで歩を進めて議論しないのかといつもおかしく思つておる。(略)

即ち俳句というのを子規の命名の意に反し、俳句という文字が現す広義の意味に解し、発句はもとより俳諧の長短の平均ひら(発句でない句)全部を含むものとし、無季

の句はもとより十四字の句もまた独立して可なりと思つておる。(「俳句という語」『俳談』昭和十一年一月・\* 11、引用文中のへ)内は原文からの補填である。)

虚子の言は次の三点を除けば画期的なものである。②については「発句はどこまでも発句であつてそれを俳句というのはいけない」という議論が成立つといへば成立し得る。」との言により代弁していると言えなくもないが、俳諧の座における正客の挨拶であるが故の発句の季語(当季)、切字必須性という観点の欠如あるいは希薄さは如何ともし難い。

① 「独立して発句と」なつたのではなく、「発句が独立して俳句と」なつた。

② 発句が俳諧から独立して俳句となり、続く脇句、第三、平均、挙句の全てを失つた時点で、その定義、役割、及びそれと表裏一体の形式、内容など全ての面において、もう既に元の発句ではない。即ち、発句イコール俳句ではない。

③ 子規は『俳諧大要』を始め「発句というものを俳句」と称えることにした」とは何処にも書いていない。

虚子がこうした大胆な発言をする背景には、自分が育てた若い世代の俳人たちが新興俳句の世界で華々しい活躍をする中で、「ホトトギス」だけでなく俳壇全体の総帥である筈の自分が脚光も浴びず蚊帳の外に押し遣られてることに対しての沸々と煮えたぎる不満と苛立ちの気持ちがある。

しかし、「守旧派」虚子がこのままの発言で終わる訳がない。

右掲の威勢の良いフレーズの後には直ぐに前言撤回、次のようにあつという間にトーンダウンしてしまうのである。

かねがね思っていたことをつい言ってしまったが、しかし一応はそういうことも言えはするが、折角(略)俳壇の先覚者が命名したものを、漫りに変革することは慎むべきで、そんな風に定義を変更して紛糾を来すのは思ふなことである。(略)

無季の句は理論として成立たないことはないが、実際は力が薄い。(略)あるいは川柳の後塵を拝するものに終るかもしれない。(「俳句という語」『俳談』昭和十一年一月・\*11)

こうして、先の画期的な発言は単なる一時のパフォーマンスに過ぎなかったことを自ら露呈してしまうのであるが、虚子がそこまで「かねがね思っていた」ことは特筆に値する。また、無季俳句が「川柳の後塵を拝する力の薄いもの」などでないことは、現在に至るまでの数々の佳句、名句の存在がそれを明白に示している。

そして、虚子はこれら一連のトーンダウンした発言の中で改めて無季の句を排斥する余り、恐らくはこれまた「かねがね思っていたこと」をつい言ってしまう。

従来の俳諧の平句にうたっている人事句の如きも、今日では大概俳句に取り入れてうたっておる。俳句というものが縦横無尽にその勢力を張って大概なものは取り入れておる。無季の句とか短句とか折角独立したところで、

俳句に拮抗してその独立性を確実にするにはよほどの努力を要する。(略)

俳句は偶然の使命として季題というものを荷って来た特別の文学である。この偶然というのは決して偶然でなく、我国が花鳥風月に富んでおるために起ったことで、花鳥諷詠の俳句が今日に発達して来たことは瞠目すべき文壇の偉観である。(「俳句という語」『俳談』昭和十一年一月・\*11)

即ち、右掲の後段の如く俳句は花鳥諷詠詩であるとすると虚子が、前段では俳句における花鳥諷詠だけではない平句など他の要素の取り込みを明確に認識し、その存在を是認しているのである。これは一見目立たないが先の虚子の発言と双壁を成す画期的なものである。

虚子が新興俳句に勝るとも劣らないこれだけの画期的な発言をこの時代に成し得たにも拘わらず、彼がその後の俳句にそれ以上何も出来なかったのは前節の終わりに述べた彼の年齢、立場などにその理由がある。

虚子はこの昭和十一年に先立つ昭和九年、十年、そうした彼自身の限界を次のように様々の形で述べている。

私は自分の生涯は一句風で沢山だと思ふ。(略)文芸は、ただ老熟するというまでである。横にひろげることには出来ない。したところが愚なことだと思ふ。(「一生一句風」『俳談』昭和九年三月・\*3)

私も昔は今の若い人のような考を起したこともあった



ぬ宗教家、「ホトトギス教」の教祖でもあった。

だから先ず信仰しろというのです。その外に言うべきことがないような気がするんだ。(略)師というものを信仰してかかる、それが道を得る近道であると思うですね。

今の多くの若い人にはそれが出来ない。他を信頼するということに不安を感じて、先ず自分を頼む傾きが強いです。それが幸か不幸か分らぬですね。

私を信仰しろとは言えませんがね。しかしそれに似寄ったことは言ったことがあるように思う。(信仰しろ)

『俳談』昭和九年十二月・\*5)

第六節 昭和十五年(一九四〇)

新興俳句全盛の昭和十一年(一九三六)、その熱気に煽られたかのように、虚子はあれだけの思い切った画期的な言説を成した。しかし、結局、彼は俳句においてはそれ以上何も成し得なかった。代わりに虚子はどうしたか。彼は俳句以外にそのはけ口を求めたのである。

昭和十三年(一九三八)四月、虚子は「ホトトギス」五〇〇号と時を同じくして「誹諧」(編集発行・高浜年尾)を創刊する。同誌は最初は年二回の発行であったが、昭和十七年三月から終刊の昭和十九年四月まで月刊、同年六月以降「ホトトギス」に合併された。

ホトトギス五百号記念の一として「誹諧」という雑誌のようなものを兎に角一冊刊行します。(略)

「誹諧」は洋の東西を問いません、西洋の「はいかい」を日本で紹介することも固より賛成であります。併し主として日本の誹諧を彼等に知らしめ度いと思ひます。

「誹諧」は時の古今を問いません。昔の誹諧を評釈吟味し度いと思ひますが、又今の誹諧をも験べて見度いと思ひます。

「誹諧」は独り誹諧其もののみならず、日本の国俗文化のうちにあるあらゆる誹諧的なるものをも吟味して見度いと思ひます。(ホトトギス発行所巻頭広告「誹諧はいかい HAIKAI」「ホトトギス」昭和十三年一月号)

「誹諧」第一号の内容を見ると、巻頭の高浜虚子「誹諧ということ」以下、俳文、俳諧詩、HAIKAI、古俳諧、俳句の仏・英・独訳、俳画など、実に盛り沢山の内容である。

「ホトトギス」では既に昭和十一年の虚子渡仏を機に、十月号の「仏蘭西はいく・其他」を手始めとして、十二月号からは「外国の俳句」欄の連載を始めていた。

また、「ホトトギス」には昭和十四年四月号の「連句座談会」、五月号の「ふたたび素十と」、昭和十五年一月号の高浜虚子「連句礼賛」、二月号の「連句座談会」と、連句の話題が次々と掲載される。そして、虚子は連句まで花鳥諷詠の世界に押し込めようとして次のように言う。

俳句はどこまでも花鳥を根幹としますから、俳句だけ

では十分なことは出来ません。連句は世態人情を写し、人間の生活に即します。今の若い人々の要求するところはこれを俳句にもとめずして連句にもとめるべきだと考えます。従来の行きがかりもありますし、連句の研究は私の生涯に残された重荷の一つであります。(略)

連句は俳句とは違って、縦横に世態人情を詠うものです。しかしその世態人情を詠う前後には季の句がはさまって、自然に季の句（お）がその無季の句にも及んで行くのです。連句の第一句（発句即ち俳句）には季があり、結末の句にも季があり、また中にも季の句が沢山ある。そうして自由に世態人情を詠う無季の句を暖かに抱擁しているのです。だから連句の中では無季の句が最も活躍して世態人情を描くのですが、それにかかわらず連句全体を見渡して見ると、やはり季の句（お）が強く、連句もまた花鳥諷詠の文学なりと言わねばならぬと思うのです。前にも言ったように今日の俳句はよほど連句の領分に食い込んでおる。これは連句というものを作らず唯俳句のみを作っておつたために勢（いきおい）そうなつて来たのであります。連句を作るようになったならば、もつと自由に世態人情が詠えることを見出すであります。それというのは、季の句いはいながらも、季に束縛されずに、世態人情を諷詠することが出来るからであります。(二連句の研究は私の生涯に残された重荷の一つ)『俳談』昭和十五年一月・\*13)

虚子はこのでも「発句即ち俳句」と言い、発句の独立化がもたらす当然の変化に少しも思いが及ばない。その一方で、前節にも述べた俳句における花鳥諷詠だけではない他の平句的要素の取り込みを明白に認識し、その存在を認めている。

また、先の「ひやひやと昼寝」で述べたように、虚子自身が既に昭和十二年十一月に次のような句を作っている。

身の上に法冷かに来りけり

高浜 虚子

これは季語が入っているから有季俳句というだけで、本考の「祇王寺」の句などより余程無季の趣の強いものである。虚子はこうした自身の混乱を次の文に正直に吐露している。

兄さんなどと一しよに連句の研究を始めてもう五、六年になるが、お前たちもたとい連句を作ることにはたさわからないにしても、連句の研究は一通りして置く方がよからうと思う。それはお前たちに勧むるばかりでなく全俳壇の人に勧めたいことである。連句というものを知るとその発句——番初めの句のことで今日は俳句と言つておるところのもの——というものの性質が最も明白に判つてくるのである。今日では発句というものと他の句——俳諧の第二句以下の句——の区別が混雑して来ておるのである。これは俳句の発達とも言えるのではあるが、しかしながら発句本来の性質を考えてみると往々にして思（おも）半ばに過ぎるものがあるのである。(一連句の研究を始めたらよからう)『立子へ抄』昭和十七年一月)

## 第七節 結語

虚子の混乱は現在の俳句界のそれでもある。その混乱を解くにはどうすれば良いか。

虚子は「無季の句はただの十七字詩である。」と言ったが、俳句はただの花鳥諷詠詩でも、ただの有季俳句でもない。

俳句は花鳥も世態人情も、有季も無季も隔てなく縦横に詠むことの出来る「立派な十七字詩」である。そのことを皆が認め実作を通してより確かなものにして行けば良いのである。

虚子は新興俳句の時代、種々の「ホトトギス」座談会で再三次のように言った。文中の「諸君」は同文に限れば座談会出席者を指すが、同義の「何ぞ大志なきや」『俳談』昭和九年十二月・\*5)冒頭には「この頃の俳人諸君」とあり、広く新興俳句の人々をも指す内容である。

諸君は大志がない。もっと他の創作界に踏み出して自らな手腕をふるって見る気はないか。それがあれば、俳句をいじくりまわして変なものにするようなことはせぬだろうと思う。ただ俳句という小さい家にもつて、そこでのみ仕事をしようとするから昏迷こんめいに陥るのだ。私は文芸に対しては進歩的の考えを持つているつもりだが、俳句には多年携わっているので、諸君ほどいじくりまわす気はない。それは俳句に対して忠実であるからだ。

俳句は小さいから名を成しやすいかもしれないが、それだから俳句界を去り得ないというのは卑怯だ。(略)

俳句というものは、俳句でなければ言えないことがある。そこが神髄である。その神髄を見極めようと志す人は少ないと思う。

早晚諸君の眼覚める時が来るであろう。本来の俳句というものに気が付く時が来るであろう。(俳句でなければ言えないもの)『俳談』昭和十年十月・\*9)

しかし、虚子は俳句に多年携わって自らの「一生一句風」を築き上げ、その「ホトトギスの俳句」に忠実だけである。新興俳句の「諸君」は俳句の中にこそあるその神髄を見極めようと志し、本来の俳句というものに目覚めようとした。

大志がないのは、自らの俳句世界を固守したまま俳句の外にそのはけ口を見出そうとした虚子の方である。

虚子は秋桜子、誓子、草城始め幾多の若い俳人を育て、新興俳句の生みの親となった。また、その秋桜子を追い詰めて新興俳句の引き金を引いた。そして、自らも「祇王寺」の句を詠んで無季の扉を開け、続く新興俳句の時代には次なる俳句革新へ向けての画期的な道筋まで提示した。

虚子が自らそれを実行に移すことが出来なかったのは、彼のエントロピーが既に極大に達していたからである。

彼の遺したことをやり遂げるのは新興俳句の時代を引き継ぎ、虚子の時代を引き継いだ現代の俳人たちの仕事である。

子規の俳句革新から今年で丁度百年が経過する。今こそ新たな俳句革新を行う時であり、新しい時代の扉は「押せば開く」のである。

参考文献

- \* 1 「漫談会（第四回）」（秋桜子、橙黄子、水竹居、花蓑、青邨、虚子）「ホトトギス」昭和四年一月号
- \* 2 「ホトトギス」誌上に原文が見当たらず、現段階で出典不詳
- \* 3 「還暦座談会（三）」（虚子、草田男、たかし、風生、青邨、花蓑）「ホトトギス」昭和九年四月号
- \* 4 「還暦座談会（十一）」（虚子、青邨、草田男、たかし、雉子郎、水竹居、風生）「ホトトギス」昭和九年十二月号
- \* 5 「還暦座談会（十二）」（虚子、水竹居、泊月、青邨、花蓑、草田男、風生）「ホトトギス」昭和十年一月号
- \* 6 「連作論其他」（虚子、清三郎、圭草、草田男、白草居、青邨）「ホトトギス」昭和十年五月号
- \* 7 「座談会」（虚子、草田男、青邨、花蓑、清三郎、風生）「ホトトギス」昭和十年七月号
- \* 8 「座談会」（虚子、草田男、青邨、水竹居、清三郎、濛人）「ホトトギス」昭和十年九月号
- \* 9 「髪を結う一茶」其他座談会」（虚子、青邨、秀好、清三郎、水竹居、花蓑、草田男、風生）「ホトトギス」昭和十年十一月号
- \* 10 「座談会」（虚子、水竹居、橙黄子、濛人、風生、秀好、青邨、草田男）「ホトトギス」昭和十年十二月号
- \* 11 「座談会」（虚子、清三郎、濛人、たけし、秀好、青邨、夢香、花蓑）「ホトトギス」昭和十一年三月号
- \* 12 「連句座談会」（鹿郎・閑古・茅舎・水竹居・年尾・虚子）「ホトトギス」昭和十四年四月号
- \* 13 「連句座談会」（濛人、椎花、水竹居、虚子）「ホトトギス」昭和十五年二月号
- \* 14 『俳談』高浜虚子著、平成九年（一九九七）、岩波文庫
- \* 15 『虚子の京都』西村和子著、平成十六年（二〇〇四）、角川書店
- \* 16 『定本高浜虚子全集別巻・虚子研究年表』松井利彦著、昭和五十年（一九七五）、毎日新聞社
- \* 17 『祇王寺日記』高岡智照尼著、昭和四十八年（一九七三）、講談社
- \* 18 『句集虚子』高浜虚子著、昭和五年（一九三〇）、改造文庫
- \* 19 『昭和の名句集を読む』宗田安正著、平成十六年（二〇〇四）、本阿弥書店
- \* 20 『高浜虚子』水原秋桜子著、平成二年（一九九〇）、永田書房
- \* 21 『立子へ抄』高浜虚子著、平成十年（一九九八）、岩波文庫

## 後記

前田霧人

幸いに、第二号も沢山の皆様からありがたい御言葉を賜りました。ここに改めて心より厚く御礼を申し上げます。

諸事情により前号から半年が経ってしまいました。新年一月吉日を期して、ここに第三号をお届けいたします。

今号も例によって下手の長文ばかりですので、谷口慎也「連衆」代表の御厚意により、同誌50号記念号に寄稿の短文を巻頭にありがたく転載させていただきました。

なお、今号より手作りの不体裁解消と労力削減のため、印刷製本を格安の会社に外注することといたしました。

昨年は林桂氏に「俳句界」十月号の「俳句界時評」で拙誌の御紹介を賜り、また、川名大氏には「俳句研究年鑑2009」の「今年の評論・俳論」で拙考「新歳時記考序説」の御紹介を賜りました。本当にありがたいこととございます。

そして、二〇〇九年版「角川俳句年鑑」の片山由美子「巻頭提言」にも、ほんの二行ですが拙誌の御紹介を賜りました。皆様の御言葉により「無季有季俳句融合の理想境」実現のための論という拙誌の原点を改めて肝に銘じた次第です。

また、それだけ責任が重くなった気がいたしますが、他方で愚妻からは「楽しくやるのが一番、それが長続きの秘訣」と常に言われております。

結局、何をやるにしても最後は体力勝負、健康に留意して猪突、牛歩織り交ぜ、マイペースで参りたいと存じます。本年も御指導御鞭撻の程、どうぞよろしく御願い申し上げます。

「新歳時記通信」第三号

発行日 二〇〇九年一月十九日

編集発行 前田霧人

発行所

電話

FAX

メール

表紙絵 浅田照行

「新歳時記通信」ホームページ

<http://kirihito.holy.jp/sajit/>

印刷製本 株式会社イニユニツク